

# 近世大坂書林の江戸板取扱窺見

— 森島中良の著作を軸に —

石 上 敏

- |             |                  |
|-------------|------------------|
| はじめに        | (6) 地誌           |
| 1. ジャンルに沿って | 1) 日本地名便覧        |
| (1) 浄瑠璃本    | (7) 戯作本          |
| (2) 狂歌本     | 1) 田舎芝居          |
| (3) 考証随筆    | 2. 未刊本について       |
| 1) 桂林漫録     | (1) 『琉球談』巻末予告の実態 |
| (4) 海外情報    | 1) 紅毛知恵海         |
| 1) 紅毛雑話     | 2) 朝鮮談           |
| 2) 万国新話     | 3. 稿本補遺          |
| 3) 琉球談      | (1) 中良著作の写本の少なさ  |
| (5) 教訓本     | 1) 紀行            |
| 1) 鄙都言種     | おわりに             |

## はじめに

先に私は、「森島中良の著作における江戸と上方—出版システムの問題を中心に—」<sup>1)</sup>と題した拙稿において、近世中、後期に江戸で活躍した、蘭学者にして文人戯作者である万象亭森島中良の著作を対象とし、この時期の江戸の板本が、江戸と上方（特に大坂）とどのように異なった取り扱いを受けたかという視点から、それに関する問題について粗々と論述した。それは、主として当初江戸で出版<sup>2)</sup>されながら上方へとその板木が移動した本が、予想される、江戸とはまた別の自主規制の制度・運用によってどのように取り扱われ、販売・流通したかという関心に基づくものであった。

ただ、前稿は、板本よりも、むしろ稿本や稿本以前の草稿の類の考察へと傾いた嫌いがあった。そこで本稿では、極力板本を中心に、その著作としての存在を支える板木（これは、ほぼ当時の版権でもあった）そのものを対象にして、中でも、当初江戸で出版されな

1) 『地域と社会』創刊号、1999年3月。以下、本稿では、これを「前稿」と称する。

2) 「板」と「版」は基本的に当時の意識・用例に基づき「板」を用いるが、近代的意識の所産である版権、近世・近代を通じて用いられる出版などは「版」を用いることとする。

がら大坂へと板木の移動したことが明らかなものを対象に、これらに検討を加えて行きたい。

もちろん、「大坂に板木が移動した」というのは、求板（購入）されたからであり、需要（商業的価値もしくは成算）が見込まれたからにはほかならない。何の理由も目的もなく、相当の輸送費が予測される板木や板本が、江戸から上方へと運ばれるわけではないからである。ただ、その点に関しても、著作の内容と大坂への求板ということに関連性があるのか否かという点に関して示唆が得られればと考えるものである。

本稿で中心的に依拠することになる「板木総目録株帳」や「出勤帳」<sup>3)</sup>に拠れば、近世中、後期を通じて、江戸から大坂に、いかに多くの板木が流れ込んでいたかを知ることができる。そして、この「株帳」「出勤帳」の中には、森島中良の著作の記載もまた、繰り返しあらわれるのである。

ちなみに、板木の総目録が「株帳」であるというのは、板木そのものが、先にも記した通り、「板株」や「株板」と呼ばれるように）実質的に版權（出版権）でもあったからである。板木を所有、あるいは分有する者が、そのそれぞれに相応する「株」（財・権利）をも所有していたということになる。したがって板木の売買は株の売買であり、板木に付属する財もしくは権利の売買でもあった。このことを逆から見れば、板木そのものがそれらの権利を保証する証券・手形でもあった。

当時の整版技術に基づけば、書物すなわちその成立の条件となる板木の複製は実に容易であった<sup>4)</sup>。仲間行事（出版自主規制のジャッジメン）が、ほとんど重板（違法複製）と類板（アイデアの盗用、もしくは偶然の一致）にのみ神経を使って目を光らせたのは<sup>5)</sup>、そのような理由による。重板がおこなわれれば、版權の付属する板木を保持することによ

3) 前者は、主に大阪府立中之島図書館編・刊『大坂本屋仲間記録』第13巻「板木総目録株帳二」の文化9（1812）年改正、文化15（1818）年（同年中に文政に改元）出来本（以上は裏表紙への記載による）全9冊に従い、適宜、同第12巻「板木総目録株帳一」（寛政2年改正）や、「新板願出印形帳」「開板御願書扣」などを参照する。後者は、同じく『大坂本屋仲間記録』第1巻～第8巻を引用する。

板木の開板・譲渡・求板・差構など、板木による書物の印刷・販売などを可能にする営業権もまた株（仲間株）と呼ばれた。株を取得し、本屋仲間に加（実務を応分に負担）することで、実質的に「大坂の本屋」としての営業が可能となったのである。ただし、本稿で論ずる「株」は専ら板木に付属する権利を指し、営業権としての「株」を指さない。

4) 近世中、後期には、活版印刷はほんの僅かな例外を除いて存在せず、板本のほとんどは製版印刷によって作成されたが、その場合には板下（板刻用原稿）の代わりに一揃いの板本が存在すれば、同等の作業量によって板本の作成が可能であった。

5) 知られる限り、京都へと求板された1点（『琉球談』）を除き、上方に求板された中良の著作（その板木）は、少なくとも当初は大坂へと移動した。例外的な京都への1点も、前稿・本稿で述べるような「差構」（出版に対する意義申し立て）がなければ、大坂の書林に求板された可能性が高く、最終的に大坂へと移動している。

ところで、これほど江戸・大坂間を板木が移動しているのであれば（京都の場合はどうであっただろうか。海路であれば江戸→大坂→京都、陸路であれば江戸→京都→大坂という経路を通ったことは間違いないが、板木の移送がいずれに偏していたかは寡聞にしてこれを知らない）板木の遺失・紛失も実際に多かったであろうし、破損も少なからず生じたに違いあるまい。それにとりまう余儀なき異板の出現もかなり頻繁であったのではないか。焼板（板木の摩滅や焼失）による再板は仲間記録に散見されるが、異板というものが一に利益のためのものであったというより他の、アクシデントへの対応といった事情を考える必要があるだろう。その場合、重板に関して必然的に異板が次々に成立する人名録や地図、名寄せなどのような書物の存在は、異板作成のノウハウの蓄積に寄与したであろう。

る権益が、ほぼ完全に侵害されるからである。

以下本稿では、江戸で出版された40点<sup>6)</sup>ほどの森島中良の著作の中で、大坂へと板木が求板されたことの明らかな9点を対象として、その背景や経緯、また移動の結果もたらされた事実関係などを中心に考察するものである。

## 1. ジャンルに沿って

### (1) 浄瑠璃本

森島中良が最も早期に携わった文芸ジャンルが浄瑠璃であった。安永8(1779)年2月2日初演(結城座)の『矢口／後日 荒御霊新田神徳』<sup>7)</sup>を、福内鬼外(平賀源内)・二一天作(吉田二一であろう)と合作している。同じ年に、源内から独立して加わった『驪山比翼塚』(安永8年7月7日肥前座で初演)は、それまでは専ら師匠源内(福内鬼外)の膝下で浄瑠璃に関わっていた中良が、著者(共著者)として独り立ちして関わった最初の著作板本といえる。『驪山比翼塚』は、浄瑠璃作者海一沫・吉田鬼眼・達田弁二との合作。「蜀山人判取帳」<sup>8)</sup>によれば、中良は中之段三場(中之巻三段のことか)と大鳥村初段を受け持っている。評判記『評判鶯宿梅』や『義太夫執心録』に大当たりを取ると記す。

『驪山比翼塚』は、江戸では、松本屋万吉・上総屋利兵衛の相板であったが、「大治郎」すなわち大坂木挽町南之町の大津屋治郎右衛門によって求板されたことが、以下の「板木総目録株帳」(文化改正)の記事によって分かる。寛政改正本にはいずれの記録もなく、寛政2年以降の求板であることはほぼ確実である。文化改正「株帳」第八冊の内「操浄瑠璃」の条には、次のように記載されている<sup>9)</sup>。

- |         |                |     |
|---------|----------------|-----|
| ① 驪山比翼塚 | 〈慎〉七行          | 大治郎 |
| ② 万代曾我  | おちよ／半兵衛 七行〈慎〉  | 大治郎 |
| ③ 万代曾我  | おはん／長右衛門 七行〈慎〉 | 本清  |

①の『驪山比翼塚』については、上記の通り、出版に関して問題はあるまい。

それに対して、「万代曾我」と銘打たれ、天明元(1781)年正月より三日替わりで上演された『お千代半兵衛』『お半長衛門』『おなつ清十郎』のうち、「板木総目録株帳」に登載される前二者は、いずれも江戸では松本屋万吉と上総屋利兵衛との相板であった<sup>10)</sup>。しかし、②の『お半長右衛門』は③の『お千代半兵衛』と離れ、ここですでに大津屋治郎右

6) その一覧は、注1)の前稿中に掲げた通りである。

7) 本稿も前稿に準じ、板行された本(板本)を『 』、板行されなかった本(稿本・写本など)を「 」に括って区別することとする。また、角書き・割書きは／を以て示す。

8) 浜田義一郎『『蜀山人判取帳』補正〈翻刻〉』(『大妻女子大学文学部紀要』2、1970年)参照。

9) 論述の便宜に鑑みて、以下、①～⑨の通し番号を振る。また、引用文中の〈 〉は印を示し、〈 〉の中は印記や書き込みを示す。以下、「板木総目録株帳」引用に私に付した記号は、その初出時点で注記する。〈慎〉は仲間行司(慎組)の組印。他に、中良著作に関わるものとしては、明組・審組の組印がある。

10) 3作の内、最初に板行された『お千代半兵衛』の奥付広告(3作が並べられ本作のみ「出来」とする)は、「右之本近日追々売出申候」とし、この時点では3作とも松本屋・上総屋の相板の予定であった。『おなつ清十郎』のみ松本屋の単独板となった理由は未詳。

衛門ではなく、本屋清七へと板元を異にしていたわけである。また大坂本屋仲間の記録には載らないものの、当初から他の二作とは異なって松本屋万吉の単独板であった『おなつ清十郎』は、大治郎にも本清にも求板されなかったわけで、このときにはすでに板元を異にしていたと考えてよいだろう。それも、『おなつ清十郎』の場合には、記載漏れでなければ（また「株帳」に捕捉されない期間に大坂へと移動していなければ）、その板木は江戸に留まっていたものと考えられる。

ところで、浄瑠璃本の場合、板木の移動というのは実際の上演に伴ったものであった（その場合が多かった）はずであるから、「板木総目録株帳」に「万代曾我」三冊の内『お千代半兵衛』と『お半長右衛門』<sup>11)</sup> が載り『おなつ清十郎』が載らぬことは、前二者の上演が頻繁であったことと連動するのであろうか。あるいは、『おなつ清十郎』に何らかの禁忌意識が付随したのであろうか。上演されないものであれば、無論そのまま店晒しにされ、しまい込まれたまま、板木は消滅したであろう。

『義太夫年表近世篇』によれば、『お千代半兵衛』の再演は文政9（1826）年に至っての薩摩座が初見であるが、これ以前にもおそらく上演されたであろうことが、上記に見る大坂での正本の板行によって類推される。ちなみに、文政9年時の上演は「八百屋の段」であり、『義太夫年表近世篇』によって知られる限り、以後『お千代半兵衛』は専ら「八百屋の段」が上演されることになる<sup>12)</sup>。

## (2) 狂歌本

森島中良は、天明初年、江戸狂歌壇に加わるのと軌を一にするように戯作へと傾倒して行く。「蜀山人判取帳」<sup>13)</sup> に収まる、上野忍岡で開催の「戯作者の会」に際しての喜多川歌麿の摺物が「作者とさく者の中（仲）良く」と記す、中良（戯作者万象亭・狂歌師竹杖為軽）もまた、そのような狂歌壇と戯作壇の蜜月を演出した中心人物のひとりであった。彼の編集に成る狂歌本は、『絵本見立仮譬尽』（天明3（1883）年正月、須原屋市兵衛刊）<sup>14)</sup>、『狂文宝合記』（天明3年7月、上総屋利兵衛刊）<sup>15)</sup>、続いて、これは万象亭一門を糾合し

11) 『お半長右衛門』は、「出勤帳二十三番」によれば、文化6年正月11日の寄合に「河太」すなわち河内屋太助から添章が出されている。本屋清七よりの求板であろうか。ちなみに、同日同時に河太から添章が出されたのは、江戸板の『椿説弓張月続編』『浮世風呂』『金神長五郎忠孝話』『道中膝栗毛八編』と、この『おはん長右衛門』の計五点であり、とりわけ中良が深く関与した（拙著『万象亭森島中良の文事』第1章第2節参照）『浮世風呂』『膝栗毛』の名がここに見えることは、奇遇の感慨を禁じ得ない。

12) 同書では、「八百屋の段」の上演は、文政9年以後、幕末までに28回の多きを数える。無論、実際の上演回数は、これだけに収まるまい。

13) 注8)に同じ。

14) この撰集によって中良がかつての松尾芭蕉の事蹟を意識しつつ、狂歌壇へと打って出る自己の客気をパロディ化して見せたと考えられることに関しては既述した（拙著『万象亭森島中良の文事』第3章第3節）。

15) 狂歌の師匠に当たる元木綱、源内門の先輩格に当たる平秩東作との共編という形をとるが、この催しの実質的な主催者が中良（初代竹杖為軽）であったことは、従来これを示唆する『狂文宝合記』中のいくつかの狂文や烏亭馬作『太平楽記文』（天明5（1785）年刊）などのほかに、『狂文宝合会報條摺物』などによって確実である（拙稿「狂文宝合会報條摺物に触れて」『書誌学月報』58、1996年参照）。

たものであり、狂歌に限らず和歌や発句や漢詩も載る名所絵本であったが、『絵本吾嬬鏡』（天明7（1787）年正月、鶴屋喜右衛門刊）を編んでいる。

さらに、寛政改革の最中に刊した、これも見立絵本のひとつに数えられる『絵本纂怪興』（寛政3（1791）年正月、西村源六刊）があるが、これは、はたして中良がどれだけ関与していたか、いささか疑問の残るものである<sup>16)</sup>。

さて、ところで「板木総目録株帳」第一冊の内に「狂歌」の項目があり、分量として99点（寛政改正）、149点（文化改正）を数えるが、このリストを通覧する限り、江戸狂歌本<sup>17)</sup>に対して、ある種の敬遠意識がはたらいっているように思われる。たとえば、上に掲げた中良編の狂歌本は、いずれも「板木総目録株帳」には登載されていない。どれも江戸の狂歌師の詠草を中心に選んだ撰集であるから当然だろう。しかし、現在一般に江戸時代の狂歌の代表とも目される天明狂歌の撰集の中でも有名な、江戸で流通・普及した狂歌本が、文化改正「株帳」に至ってあらわれる『古今馬鹿集』『四方のあか』などのわずかな例外を除いてことごとく載らないことは、「大坂の狂歌本」と「江戸の狂歌本」とが明確に選別されたことを示しているであろう。それに比して、「京の狂歌本」への選別意識は、それほどはたらいっているとは思えない。

ひとつは、かつて論じたような<sup>18)</sup>、江戸狂歌的なものが上方に波及しなかったことの実質的な背景として、江戸狂歌の撰集が上方で刊行されなかったというのは実に大きな理由であったといっていよう<sup>19)</sup>。

江戸戯作とは異なる上方戯作が確固としてあったように、造本形態（表紙の色や模様・題簽の趣味・扉の様子や枠の意匠など）からはじまってその内容（歌体はもちろん、趣向など）も確実に異なるような「上方狂歌本」というものは、幕末までを通じて存在したように見受けられる。従来（江戸時代の狂歌が論じられる際にすら）等閑視されることがほとんどであった「上方狂歌本」の具体的な詳細に関しては、中野真作氏・西島孜哉氏らによる綿密な報告によって、近年急速に整理されつつある<sup>20)</sup>。

以上、本節では、上方への求板が確認されなかった狂歌本について瞥見したが、このように、江戸から上方へと板木が移動しなかった例を考えることもまた、森島中良の著作に限らず近世期の出版を考える上で意味のないことではあるまい。

16) 拙著『叢書江戸文庫 森島中良集』（国書刊行会、1994年）解題参照。

17) これが従来の文学史における「近世中後期狂歌」の概念と、ほぼ合致するのである。すなわち、「文学史」は、近世前期の上方狂歌と、中期の江戸狂歌を記述して足れりとしてきた。

18) 「天明狂歌とは何か—その逆説的本質について—」（『岡大國文論稿』第25号、1997年）。ところで、筆者の関心に基づけば、以上述べたような点と江戸狂歌の「月並み化」とは、どのように関わってくるだろうか。また、天明狂歌本の大坂への移動がほとんどなく、それも寛政期以降の求板が中心であったことは、実質的な影響がなかったことを意味するであろう。

19) 逆に、四方歌垣派のとなえた「俳諧歌」などは、時間軸を溯った「古体の狂歌」とであると同時に、上方で連綿と続いていた「狂歌の伝統」を意識して取り入れたもの（少なくともその側面がある）であった。和歌の管理者たる宮廷世界へのあからさまなすり寄りがそのことを示しているであろうし、著名な「宗匠位事件」は、当初からそのような「伝統」への帰順意識と結び付いていた。

20) 中野真作「狂歌譚談手まえみそ」『羽衣国文』連載、同「狂歌滴瀝」『羽衣学園短期大学研究紀要』連載、西島孜哉『近世上方狂歌の研究』（和泉書院、1990年）、西島孜哉・光井文華『近世上方狂歌叢書』（和泉書院）など。

### (3) 考証随筆

いわゆる文芸的な随筆（現代のエッセイに通じる）のみを「文学」の範囲内に考えてきた従来の文学史は、江戸期に特有のジャンル「考証随筆」を長く無視して来た<sup>21)</sup>。しかし、当代の「文学」概念に従うならば、これは文学外のジャンルでないことはもちろん、文学周辺のジャンルでも、周辺文学でもなく、純然たる文学的営為に成る、むしろ中心的な文学ジャンルのひとつであった<sup>22)</sup>。近年、近世文学のジャンル見直しの機運<sup>23)</sup>に伴い、言及されることの少なくない考証随筆であるが<sup>24)</sup>、雅俗や教訓滑稽といった文芸意識の内外を往還しつつ、より正統な「文学」に近接したという意味において中心的である重要なジャンルのひとつと認識すべきであろう。

森島中良にも、いくつかの考証随筆が存在する。というより、寛政期から漸く興隆する考証随筆というジャンルにとって、中良はいくつかの意味において重要な人的機縁をなす人物のひとりであった。ひとつには、藩主松平定信の下で編まれ、明らかに次代の「考証随筆ブーム」を先導することとなった『集古十種』（寛政10（1789）年刊）の成立に、中良もまた関与した可能性があるからである。定信の下で、この大部の叢書が編纂されている時期に、中良は白河藩に仕官している<sup>25)</sup>。そして、ちょうどその完成をまつかのように致仕しているのである。無論筆者は、中良と『集古十種』を強引に結び付けようとするものではない。「小峰城逆旅偶筆」に木村礼斎の記す「小納戸格」の職掌内容について、具体的にはどのようなものであったかは未詳であるが<sup>26)</sup>、『新撰洋学年表』のいうように、寛政9年に致仕するに当たり、「遠西本草攬要」（その稿本は焼失して残らないと伝わる）訳述の功を以て特に俸五口（五人扶持）を給せられるという情報が事実かそれに近いのであれば<sup>27)</sup>、同様に白河藩で進められていた『集古十種』の編纂作業についても、当然知悉

21) おそらく、既成の『徒然草』イメージに打ち消されてのことであろう、余り言われないことではあるが、「考証随筆」は、近世・近代を通じて文芸的な随筆の代表と目されて来た『徒然草』にすでに包摂されているのであり、その意味でも、「考証」のゆえによって、これを「随筆」の異体、あるいはさらに圏外・周辺にとらえる視角は当を欠いていると言えるのではないか。

22) 注16)に同じ。

23) 拙稿「平成7年学会時評（近世・小説Ⅴ 戯作）」『文学・語学』に簡単な見取り図を述べた。

24) たとえば、近年の文学史（『日本文学史』おうふう、1998年）は、実録体小説・評判記と並べ、考証随筆に項目を割いている（鈴木健一氏執筆）。また『国文学』1999年2月号「特集・ジャンルを横断する近世文学の新局面」の「新ジャンルを開拓する」に簡潔にまとめられる（西田政宏氏執筆）。

25) 寛政4（1792）年から同9（1797）年まで。大槻如電編『新撰洋学年表』による。

26) 仕官中に白河藩での訳述プロジェクトに加わっていたのであれば、言い換えれば、中良がただ単に「言論統制」（今田洋三『江戸の本屋さん』）すなわち口封じのために白河藩に抱えられたり、あるいは医師として仕官（ただし、その場合に「小納戸格」という身分呼称はやや不自然である、ただしその意味では、紅毛本草の訳述役としても、「小納戸格」との呼称にはいささかの齟齬を感じざるをえない）したりしたのでないのならば。

27) 「俸五口」というのは、例えば三田村鳶魚が「奥医師のはなし」（中央公論社版『三田村鳶魚著作集』所収）でいう大名家での診察を思わせるのであるが、その職掌が医師であれば、藩の記録に残る可能性はより高かったであろう。

ところで、金沢藩前田侯がしきりに中良の仕官を乞うたという伝承も、おそらく白河藩への仕官の事実と、そこでの僅か数年後の致仕という事実を踏んだものではなかったか。もちろん、蘭学者としての中良の海外情報への精通に対しての関心であった可能性も同様に高いが、もし定信が中良の海外知識を重視して仕官を求めたのであれば、むしろこの時期以降にその方面への知識は必要とされたはずである。もっとも、この点は類推を可能にする資料の充実をまって考察すべき事柄であろう。現時点では、中良の仕官の期間すら公私の史料によって確認できない状況である。

していた可能性は低くないと考えるのである<sup>28)</sup>。

文化以降の考証随筆の季節に先駆けて著された彼の考証随筆の内、以下に検討する『桂林漫録』（寛政12（1800）年6月刊、桂林舎蔵板）は、とりわけその代表的なもののひとつと目されてきた<sup>29)</sup>。また、これら板本の形を成したものに限らず、その遺文を検討するならば、中良の白河藩への仕官がなかったならば（あるいは定信による寛政改革が出来しなかったならば）彼が和漢洋にわたり時代を画する考証随筆集を編集したであろうことは、確実であったと思われるのである。

さらに、その遺文は、本の体裁を成さぬまでも「考証」に満ちており、加えるに、小山田與清・屋代弘賢・中村仏庵といった、次代の代表的考証随筆の著名な著者たちとの交際が、むしろ彼らの考証随筆編集・執筆を刺激したであろうようなあり方で、いくつも指摘できる<sup>30)</sup>。中良と考証随筆との関わりを見るうえで、この点を見過ごすことはできないであろう。

### 1) 桂林漫録

「板木総目録株帳」第二冊「随筆」の部<sup>31)</sup>には、『桂林漫録』が載る。本書は、すでに

28) ちなみに、中良の仕官嫌いの風評を定着させた、今村亮著『洋方医伝』（明治17年刊。北沢正誠他編『蘭学者資料叢書4 蘭学者伝記資料』所収。なお、引用は原漢文を私に読み下して示した）の、「金沢侯、家臣と為すを以て聘さんと欲すれども、之を辞すること再三。許されず、既に仕えること数月、暇日を乞い、京師に游学して、後、息耗を通ぜざる者数年、侯、其の藩法に背くを以て、之の仕籍を削る。甫齋（注、中良の雅号。甫齋・甫山とも）、是に於て、欣然（として）東帰し、復た、兄居に依る。」という逸話は、実際に「金沢侯」（金沢藩）との関係であったとしても、白河藩との上のような逸話が転化した要素は大きかっただろう。寛政4年に仕官（「既に仕える」）し、同9年に「仕籍を削られる」というのは、時間的には『洋方医伝』と合致する。ただし、中良の白河藩仕官が「数月」ではなかったことは、寛政6（1794）年2月に兄甫周が幕府に届け出た江戸長崎屋での出島商館長一行との対話願書（大槻玄沢『西賓対晤』所掲）の中に、「松平越中守家来 森島甫齋」と記されていることによって確認できる。これがもし「游学」を称した蒸発中のことであれば、中良は、5月4日、5日の対話には出席できなかったに違いあるまい。また、幕臣や藩士も多数出席した、同年閏11月11日の第一回新元会、所謂オランダ正月にも参加が憚られたのではなかったか。同じく寛政6年に成立した先掲「小峰城逆旅偶筆」にも、「蘭学は森島中良と云人、江戸桂川法眼の弟にて白川に仕へ、御小納戸格也」と記されていることを森銑三氏が指摘している（『近世人物研究資料綜覧』『森銑三著作集（正編）』第12巻）。その他、この間中良が江戸にいたことを示す多数の理由によって同様の推測が導かれる。ただ寛政6年12月には中良は大坂におり、木村兼葭堂の元を訪ねている（『兼葭堂日記』）。間違いなく京都も通過したことであろう。中良が京都に滞在したことを明確に示す証拠は多くはなく、「京師に游学して、後、息耗を通ぜざる者数年」というのが必ずしも京都に居続けたことを意味せず、京都遊学を契機として連絡を絶ったものとも読み取れる。しかし、その後の記述「欣然東帰し、復た、兄居に依る」とは、数年間を上方に過ごしたことを示唆しており、そのような数年を森島中良の年譜の中に定立することは困難である（拙著『万象亭森島中良の文事』第5章第1節「万象亭森島中良年譜（稿）」を参照）。

29) 同じく、近世後期に簇生した考証随筆の中でもその白眉のひとつと目されて来た『寸錦雜綴』については、私はこれを中良の著作とは取らない。ただし、この本の成立に関して中良が並々ならぬ関与をしたであろうこともまた拙著『万象亭森島中良の文事』第4章第7節で考察した通りである。

30) 拙著『万象亭森島中良の文事』第2章第5節参照。

31) 「随筆」の項目に、考証随筆類をそのまま（見たところ、何の区別もなく）掲載していることが、この時代の「随筆」の概念を余すところなく示している。考証随筆については、近年漸く「近世文学」の範疇で論じられるようになった。筆者もまた中良の考証随筆を軸にかつてこれを論じたことがあり（拙著『万象亭森島中良の文事』第2章第5節、第4章第7節など）、参照していただければ幸いである。

寛政改正本にも「海勘」（海部屋勘兵衛）の板として載るが、寛政12年の初印であるから、これは後の書き入れと考えられる。

④ 〈改正〉<sup>32)</sup> 桂林漫録 二 〈改正〉海勘 〈慎〉河原

寛政12（1800）年5月に江戸で板行された『桂林漫録』（桂林舎蔵板）は<sup>33)</sup>、享和2（1802）年に再刊されている。その折りの板元は不明であるが、大坂板と考えられる。

『桂林漫録』は、当初「桂林舎蔵版」、すなわち森島中良の私家版として板行された。そして、その奥付には、「製本所」として前川六左衛門・須原屋市兵衛・萬屋太治右衛門・堀野屋仁兵衛・山田屋長兵衛の五肆が名を連ねている<sup>34)</sup>。所見本の限りで、同じ板面で奥付に「製本所」の朱印を欠くものは、すべて扉の「桂川之印」を欠く<sup>35)</sup>。欠印が扉か奥付の一方であれば見落としの可能性もあり得るが、扉・奥付共に、それも数本にわたり押印を忘れることは考えにくいので、ほぼ間違いなくこれらは（おそらく初印本の時点で「製本所」であった書肆が単独もしくは複数で）市販した本であったと考えられる<sup>36)</sup>。そして、このワンクションが間にあって（一旦商業的な本と化したあとで）大坂の本屋に求板されたのであろう。あるいは『鄙都言種』を求板した須原屋茂兵衛辺りに一旦板木（版權）が移り、そこから移動したものと思われ、両書が後に河内源七郎の蔵板となったことが逆にそのことを類推させる。『桂林漫録』の須原屋市兵衛・須原屋茂兵衛単独板は、いずれも確認できないが、中良の蔵板であったものが直接大坂の本屋に求板されるという経路は想定しにくい。

ちなみに、桂林舎は中良の書齋名<sup>37)</sup>。享和2（1802）年12月に撰した石川大浪著『聚珍

32) 「改正」（印）は求板（再板）本を意味し、それに対して「新正」（印）がありこちらが初板本と思われる。なお、書名の次の数字は冊数。一冊本の場合には原則として記されない。

33) 奥付に「明和二年」という刊記をもつ本が存在するが、その板面は明らかに後印本のものであり、明和2（1765）年といえば中良はまだ10歳で（宝暦6年出生説を採る。その根拠は、拙著『万象亭森島中良の文事』第2章第1節に詳述した）、また、本稿で考察している諸々の要素から考えても、これはほぼ間違いなく偽刻であろうと思われる。

34) 「製本所」は朱印（所見本すべて同じ）。これは、その名称の通り、桂川家で板刻したものを書店が製本のみ引き受けたと考えてよいのであろうか。ただし、奥付に「製本所」と刷り込まず、「製本所」の印を捺したところには、板刻・製本に関わるいくつかの問題があったことをうかがわせる。製本を担当するのみで5肆（それかなりの営業規模をもつ）が加わることも不自然と思われ、その奥付の様子は、当初5肆は通常の板行を担当していたことを思わせる。「割印帳」などを見る限り、『桂林漫録』の板行は支障なく進んでいたものであり、その初印本の現存数から考えて、「製本所」の5肆は、実質的には売払所の役割をも果たしたのではなかったか。

35) 匡郭を三分割した枠内に「桂川中良輯／桂林漫録／蔵版不許翻刻」、枠外上部に「寛政十二年康申仲夏」とあり、「蔵版不許翻刻」の下に「桂川之印」の朱印を捺す。

36) 文化10（1813）年正月新板の文刻堂西村源六（江戸）の新板目録の『好古愚痴録』中に『桂林漫録』が言及されるものの、これは西村が蔵板した（板木が再び江戸に戻った）というわけではない（『桂林漫録』の評判は、このように江戸でも連綿と続いたのである）。先に言及した同じく著名な考証随筆のひとつである『寸錦雜綴』もまた、大坂で板を重ねた可能性が考えられる。ただし、奥付を欠き、素性の明らかではない後印本が多く、その経路を明らかにすることができない。

37) 注95)を参照のこと。周知の通り、天明期を中心におこなわれた「万象亭」が当初中良の書齋の名称であった（『万象亭戯作濫觴』など参照）。「万象亭」の亭号は、寛政後半期以来その名を見せなくなり、それと踵を接するように「桂林舎」の舎号があらわれる。ただし、桂林舎が万象亭と同じ書齋を改称したものか、あるいは中良が書齋を移ったのかは、これを証する徴を見出せない。「万象亭」の亭号を中良が用いなくなるのは、おそらく寛政10（1789）年（芝廬屋山陽編『文化十一年板四方側狂歌摺物』（仮題）によれば寛政9年12月）に「万象」の戯号を門人森羅亭万宝（初号七珍万宝）に譲ったことによるのであろう。



画帖』序文の署名に「題於桂林舎之南軒」（印記にも「桂林書舎」）などとある。後には雅号としても用いる。したがって、「桂林舎蔵版」とは中良の蔵版と考えられる。

桂川家の蔵版（自家出版）に関しては、前稿にて少しく考察した。却って、中良の著作の中では、比較的その内容が出版規制に抵触する可能性の低く（皆無ではない）、また寛政改革が頓挫して5年後という再び弛緩した空気が広がる時期に刊された『桂林漫録』が、なぜ最初から須原屋をはじめとする書肆より検閲を経て商業出版されなかったかは未詳である。中良もしくは甫周が、寛政期以来商業出版の難しくなった蘭学関係書の出版を睨みつつ<sup>38)</sup>、家内出版のノウハウを試みておきたかったなどという理由はいくつか考えられるのであるが。

ところで、『桂林漫録』の巻末には、「桂林舎蔵版目録」として『桂林漫録』の続編を思わせる「桂林二録」が載り<sup>39)</sup>、続けて「後藤先生著、桂林先生補」<sup>40)</sup>として「古今沿革考」、また「並河吾一著、桂林先生校」として「擬集古録」が載る。『古今沿革考』『擬集古録』いずれも中良が補訂・校訂した本は実現した形跡を見ないのであるが、何らかの理由で、この頃中良が個人での蔵版をする必要があり、『桂林漫録』がその第一歩であったことは間違いのないであろう。

したがって、「海勘」（海部屋勘兵衛＝多田勘兵衛）板が享和3（1803）年刊であり、「河原」（河内屋源七郎であろう）板が、さらにその後摺であることを考えるならば、それ以前（享和二年板）までは江戸板であったと考えるべきであろうと思われる。

その場合、享和3年5月刊の多田勘兵衛板（奥付「享和三亥歳五月／浪花書林 新町西口砂場海部屋 多田勘兵衛」）が先行したであろうことは、その奥付の「享和三亥歳五月／浪花書林」をそのままに、その下の「多田勘兵衛」のみを削って「心斎橋北久宝寺町南エ入 河内屋源七郎／心斎橋通備後町南へ入 河内屋徳兵衛」と入木したものが明らかに後印と認められるからであり<sup>41)</sup>、そうであれば河内屋源七郎・徳兵衛の相板は享和2年以前に溯り得ないからである。

これ以後の『桂林漫録』の行方であるが、『桂林漫録』が両河内屋の相板以後に江戸で板行された形跡は見当たらず、『桂林漫録』の板木は、そのまま大坂にとどまったものと思われる。

それは、同じように江戸で開板され、のちに上方へと移動した他の板木にしても同様で

38) 寛政期に至り、江戸蘭学への当局よりの規制が厳しくなり、江戸蘭学者たちが危機感を感じる中で、中良がそれに呼応して啓蒙活動に意を砕いたであろうことについては、拙稿「『類聚紅毛語訳』成立の背景－長崎成立説を補足する」（『都大論究』35、1998年）に詳述した。

39) 「桂林二録」が、「古今沿革考」「擬集古録」の総称であるとする杉本つとむ氏の説（『江戸／時代 蘭語学の成立とその展開』Ⅲ、早稲田大学出版部、1978年）が備わるが、私見では「桂林二録」は『桂林漫録』の続編を予定した外題であると考ええる。

40) 「後藤先生」は後藤光生（梨春）、「古今沿革考」は享保15（1730）年序、写本で伝わる。後藤梨春は、平賀源内の田村藍水門での兄弟子であり、その意味で中良とも関わり深い。「擬集古録」は成立年未詳、やはり写本で伝わる。並河吾一（誠所）と中良との関わりは未詳。

41) ちなみに、この奥付をそのまま付した後印本の中に、明らかに明治刷りと見て間違いのないものを確認できる。これは、以下の傍証にも見るように、彼らがずっとその手元に板木を置いて、長い間刷り増しを続けたことを示唆しているものであろう。これもなお河源と河徳（いずれも廃業年次未詳）の相板であったか否かの確証はないが、この板木の最終形態と考えてよいだろう。また、相板ではあるが、「御書物所 前川文栄堂」（河内屋源七郎）の蔵版広告を付した本のあるところからも、申請者となった河源主体の蔵版であったことは間違いのない。

はなかったか。管見の限り、江戸で開板され、その板木が上方へ求板されて、再び江戸に戻った本という事例を知らない。また、大坂で開板し、江戸へ移動した板木というものも、その例は多くはなかったと見ておそらく間違いない。そして、このことの示す意味や、このことより生じた文化伝播の内実など、より以上に検討すべきことと思われる。

わずかな見通しとしては、「文運東漸」以後、いわば文化的な江戸の標高が高まることで文化の「流れ」が江戸を頂点に、そこから流れ下る形をとるといった時代背景の意味するところが大きかったものと思われる。そのひとつのあらわれが、板木のほぼ一方通行的な移動であり、またそのことによって「文化の標高差」はより広がったのでもある。すなわち、文化の中央集権化は、明治維新以来の急激かつ大量の東京集中型の文化行政に至る前に、またいわゆる文運東漸の結果としてのみならず、このような江戸後期の文化経済の形成によって、経済現象として具現化したことでもあった。

ところで、板行以来半世紀以上を経て、はじめてその作者が上田秋成であることを自ら謳った本として知られる、天保年間刊の『雨月物語』に付載された上記河内屋源七郎（大坂心斎橋通り北久宝寺町）の「軍書小説類蔵板目録」には、その3丁裏（最終丁裏）上段に、当の『雨月物語』の広告（「雨月物語 上田秋成著 五冊」）を載せ、それを挟んで右側に『鄙都言種』（後述、森島中良著）、左側に『桂林漫録』の広告が載る。「好古博識和漢の雑事に涉り」「大きに看人に益あり」云々というのが『桂林漫録』の惹句であるが、現在のところ、最初に『雨月物語』の秋成作であることを証言した人物である中良と秋成との紐帯を示す如くで興味深い。

#### (4) 海外情報

『洋方医伝』などといった略伝の類に、中良の著作として、決まって挙げられるものとして<sup>42)</sup>、『紅毛雑話』『万国新話』など海外情報を一般向けの形で紹介した一連の著作があった。これらは、その構想のほんの一部のみが実現し、全体の構想は頓挫したものであるが、それでもなおこの時期の本として先駆的なものであり、同時代の板本の中に異彩を放っている。後年の「森島中良＝蘭学者」という評価・視点の定着によって、それら蘭学関連の本が中良の著作の中でも最もクローズアップされたのもであった。

##### 1) 紅毛雑話

この『紅毛雑話』（天明7（1787）年9月、須原屋市兵衛刊）、次の『万国新話』（寛政元（1789）年11月刊）、さらには前稿で論じた『琉球談』（同2年刊）などは、海外情報の一般読者向け啓蒙書でありながら、ある意味で「考証随筆」の範疇にあるものとして考え

42) 近世期の書籍目録類に限って見ても、『近代名家著述目録』（天保5（1834）年刊）に掲出された19点の中良著作の冒頭に『紅毛雑話』、4番目に『万国新話』、6番目に『琉球談』が載り、これを参照したものと思われる『西洋学家訳述目録』（嘉永5（1852）年刊）に載る7点の冒頭と4番目に『紅毛雑話』と『万国新話』が載る。いずれも学術書に重きを置く目録ではあるが、近世末期においても、これらが中良の代表作と目されていたことを確認できる。無論、このような定評は、近代に至ってからの評伝の類にも反映している。

てよいものであった。少なくとも、その「方法」に関しては、考証随筆と径庭ないものであるといえる。

⑤ 〈改正〉 紅毛雑話 五 〈カギ〉<sup>43)</sup> 塩喜 〈新正〉河喜  
阿蘭陀紀聞・外題改

上は文化改正の「株帳」に従ったが、すでに寛政2年改正の「株帳」にも塩喜（塩屋喜助）の名で「紅毛雑話」は掲出されている。『紅毛雑話』が大坂心斎橋筋南久太郎町の塩喜に求板されたのは、寛政8（1796）年の5月（同書奥付による）であった。すなわち『紅毛雑話』の初印本（天明2年）から9年後のことである。次に見る『万国新話』の初印本奥付広告に「紅毛雑話」の書名は見えず、この時点までに求板されていた可能性があるが<sup>44)</sup>、大坂本屋仲間の記録に見る限り、塩喜板以前に大坂に求板された形跡はない。そうであれば、須原屋から板木が移動していたとしても、その行先は江戸の本屋であったはずである。その後、寛政8年の塩喜板を経て、おそらく文化年間までに、河内屋一統の本家として知られる北久太郎町の河喜（河内屋喜兵衛）に求板されたものと考えられる。河喜板は、奥付に「発行書林」として江戸書林が須原屋茂兵衛以下8肆、京都の吉野屋仁兵衛、尾張の永楽屋東四郎と菱屋藤兵衛、そして大坂の河内屋喜兵衛の計12肆が並ぶ。この奥付は、江戸で須原屋茂兵衛辺りに一旦板木が求板された可能性を示唆するであろう。

改題本の外題は、実際は「名勝／図会 阿蘭陀紀聞」であり、角書きも記載する「板木総目録株帳」としては、いささかの手抜きといえる。ただし、後補加筆の少なくない「株帳」であるから、河喜への求板の折りすぐに改題がなされたかどうかは未詳であり、遅れて改題された可能性が考えられる。

「株帳」の記載事項を見る限り、本来の外題が「紅毛雑話」であることは知られているのであって<sup>45)</sup>、また、以下に述べるように、これ以後もなお「紅毛雑話」のタイトルのみが広く知られているようであった。ちなみに「阿蘭陀紀聞」という改題が及んだ範囲は、外題（題簽）のみであり、内題や序題などは初板のままの「紅毛雑話」であった。桂川甫周と大槻玄沢の序文の順序を入れ替え、宇田川玄随の跋をその後にもってきて、以下、凡例・総目・本文と続き、最後に前野良庵の跋が来る。所見本いずれも五巻一冊であり、本来の五冊本を全一冊本として売り出した（合綴が読者や貸本屋の手でなされたのではなかった）ことは間違いない。板元が五巻を一冊に合冊し、「名勝／図会 阿蘭陀紀聞」という

43) カギ印は、元の板元を削除する印であり、別に板木がわたったことを示すものと考えられる。

44) これは、後に見るように、『紅毛雑話』の「西洋奇談」と「万象雑俎」の嗣出予告を増補したものなので、その意味で「紅毛雑話」の広告を掲載しなかった『紅毛雑話』を単に踏襲しただけのことかも知れない。

45) この場合、『紅毛雑話』のネームバリューが関与したと類推される。『紅毛雑話』が広く流通したことは、その現存本の多さのほかにも、大槻玄沢『蘭説弁惑』、木村黙老「続聞まゝの記」所掲「紅毛雑話私考」など多数の言及によって知られるところである。近世後期の海外情報本のベストセラーのひとつにこの『紅毛雑話』を掲げて、どこからも異論は出ないであろう。また、少なくとも文化12（1815）年までは、大坂でも「紅毛雑話」の外題で流通していたであろうことが、「差定帳」（『大坂本屋仲間記録』第8巻）の記事によって確認できる。11月28日付の「書付」に、「天明七年未於江戸表ニ開板御免／一 紅毛雑話 此書ハ、阿蘭陀国開闢ヨリ土地風俗其外器物製作等、色々之雑事ヲ平仮名ヲ以和解仕候書ニ御座候」と見える。

題簽を摺り出して、合冊本の表紙に貼ったのである<sup>46)</sup>。

本屋仲間への出銀（許可申請料）の必要な改題が、大坂の書店によってなされたというのであれば<sup>47)</sup>、「阿蘭陀紀聞」という外題は、「紅毛雑話」というすでに流通している外題よりも大坂（上方）的であったのだろうか。単に、こちらの方が売れ行きが良さそうであるという商業的判断に基づいたものか。あるいはまた、すでにかかなりの売れ行きを示している『紅毛雑話』とは別本と思わせることによるメリットがあった（少なくとも想定された）ということであったのだろうか。

奥付に文化年間以降の刊記をもつ『紅毛雑話』は、文化13年板、文政3年板、同11年板<sup>48)</sup>、さらに遅れて嘉永3年板があり、いずれも初印の『紅毛雑話』、また『阿蘭陀紀聞』とも同じ板木を用いて摺られている。このように、後印諸板・諸刷の流布状況を見るに、比較的はやく「阿蘭陀紀聞」への改題がなされていたとしても、それと平行して『紅毛雑話』も相変わらず板が重ねられていた可能性が考えられる。『紅毛雑話』には、これまで知られる限りで異板は存在せず（上記『阿蘭陀紀聞』の題簽を除くならば）、おそらく『阿蘭陀紀聞』以前すでに何度にもわたって板が重ねられ、十分に普及していた。そこでもうひとつ考えられるのは、『阿蘭陀紀聞』への改題以降に再び外題が『紅毛雑話』に戻された可能性である。「阿蘭陀紀聞」への改題が、文化改正「株帳」の文化15（1818）年（文政元年）までになされていたならば（補筆でなかったとすれば）、文政3（1820）年板、同11（1828）年の河内屋直助板、さらに後れて嘉永3（1850）年板が『紅毛雑話』に戻されての後印本ということになる。

ともあれ、奥付等によって知られる限り、『紅毛雑話』の板木は江戸に戻されることなく、大坂で板を重ねることになった。

46) 『阿蘭陀紀聞』が『紅毛雑話』の改題本として知られるということも—『紅毛雑話』への言及者がほぼ江戸、東京に限られたという事情もあっただろうが—、従来ほとんど知られて来なかったことであった。ところで、拙著『万象亭森島中良の文事』第5章第1節「万象亭森島中良年譜（稿）」では、嘉永3年板が『紅毛雑話』の外題での最後の刊行であり、これ以後に外題を「名勝／図会 阿蘭陀紀聞」と改めたであろうと推測したが、以上に考察したように、『阿蘭陀紀聞』がそれ以前の改題であった可能性のあることを記しておきたい。ただし、『阿蘭陀紀聞』への改題は、その板面から見てかなり年代の降ったものであろうと考えるものである（絵入題簽の様子は、天保期前後のもののように見える）。また、現存本数（2本のみ所見）から見て、『阿蘭陀紀聞』の外題をもつ本は、僅かに刷られたのみで止んだものと思われる。改題本とはいっても、上に見た通り題簽のみを「阿蘭陀紀聞」とし、他はすべて「紅毛雑話」のままに残している不完全なものであり、題簽の板木すら伝存すれば「紅毛雑話」への復題は技術的には困難ではなかった。

47) 先の『近代名家著述目録』（天保5（1834）年刊）や『西洋学家訳述目録』（嘉永5（1852）年刊）など（いずれも江戸板）にも「阿蘭陀紀聞」ではなく、「紅毛雑話」として載る。これも、「阿蘭陀紀聞」への改題が江戸でなされなかった（大坂でなされた）ことを示す傍証といえるだろう。

48) この板には板元河内屋直助の名が載り、その蔵板目録に「此書は紅毛人の物語に聞たる万国の内にあゆる奇談または蘭書に載る珍説等をしるしたる随筆なり」と見える。これは後印本の見返しに載る内容説明文の前半と同文であり、後半は「其外禽獸草木魚鳥の図説器物には虫目鏡エレキテル水機関飛行船等の図式をあらはし古今未曾有の珍書なり冀はくば四方の君子招牌を認て顧たまへと天明丁未の秋（以下15～20字程度削除）」と続く。天明丁未は天明七年で、この見返し（当初は「天明丁未の秋」以下に、須原屋市兵衛の名が彫られていたのであろう）はおそらく初印本の袋であったかと思われるが、どの板から見返しに用いたかは未詳。ちなみに、奇談・珍説を記した「随筆」という見方が当初からあった（むしろ一般的であった）事情が窺える。

## 2) 万国新話

『万国新話』（寛政元（1789）年11月<sup>49)</sup>、須原屋市兵衛刊）の最初の求板本は、『紅毛雑話』に遅れること4年、寛政12（1800）年7月の大坂浅野弥兵衛による求板本<sup>50)</sup>であった。しばしば『万国新話』が『紅毛雑話』の後編と称されるように<sup>51)</sup>これらは同趣の本であり、いずれも当初は須原屋市兵衛の板であったのにもかかわらず、『紅毛雑話』が塩喜、『万国新話』が藤弥に求板されたところは、あるいはその過程で何らかの分配措置があったものかと思わせられる。

⑥ 〈改正〉万国新話 五 相 〈カギ〉○河新 近平  
○藤弥

『紅毛雑話』の記載されている寛政改正の「株帳」に『万国新話』は載らず、寛政2年9月以後の上方への求板であったことが分かる。あるいは、その求板の時期を違えることで求板先が変わったのであろうか。

「河新」は藤弥から『万国新話』を求板したと思われる河内屋新次郎のことである<sup>52)</sup>。

49) 『万国新話』については、序・跋の年記や中良自身が「例引」に記した「寛政改元季秋端午」などの徴証は寛政元（1789）年中の板行を示唆するものの、寛政元年の奥付をもつ本を確認できなかったために、また「割印帳」に「寛政二年正月」と刊記を記すため（寛政元年12月25日割印）、寛政2（1790）年板を初印本であると考えた。そのため、拙著『万象亭森島中良の文事』ではすべて『万国新話』を「寛政二年刊」と記載した。ただし、須市板には「寛政改元十一月刊」の奥付があるのであり、本稿以降では『万国新話』の刊年を寛政元年とする。したがって、従前の「寛政二年刊」の記述をすべて「寛政元年刊」と訂正させていただきたい。なお、この点に関しては、改めて仔細に検討したい。

50) 「株帳」に見える「藤弥」、すなわち星文堂藤屋弥兵衛のこと。「寛政十二年庚申秋七月求板／大坂書肆 高麗橋一丁目 藤屋 浅野弥兵衛」とし、『和蘭新訳地球全図』『華蛮通志』の広告を載せる。藤弥は、享保8（1723）年の本屋仲間行司公認時の24肆の一舗。

51) 一例のみ挙げれば『国書総目録』は『万国新話』に「紅毛雑話の続編」と注記する。ただし中良自身は、『万国新話』を『紅毛雑話』の続編とも、同じ系統にある本とも位置づけてはいなかった。『紅毛雑話』の続編を称したのは「森島中良先生著述目録」に従えば「西洋奇譚」（未刊）であった（『万国新話』の出版予告には「西洋奇談」の外題で載る）。また、『万国新話』の既刊分は「アジアの部」であって、この後に「ヨーロッパの部」「アフリカの部」「アメリカの部」（いずれも未刊）が予定されていた。ただし、『万国新話』の例引に「書中の地名（略）釈字なきものは国字にて書する事紅毛雑話の例の如し」と『紅毛雑話』の参照を促す部分が見えるなど、これらが連続することを思わせる部分が少なくなく、結果的に中良の海外事情紹介シリーズの出版は『紅毛雑話』『万国新話』『琉球談』の三書にて止んだのであるから、『万国新話』を『紅毛雑話』の後編・続編と考える見方が生じるのは無理もないことであった。

52) 同板は、寛政12（1800）年求板の奥付はそのままに、裏見返しに「書林 大阪北久太郎町四丁目河内屋新次郎発行」とする。見返しに『間合早学問』、裏見返しに『博物筌』『錦囊智術全書』『妙術博物筌』の広告を載せるところから嘉永頃の板と思われる。同じ藤弥の奥付を残したままの本には他に3種類があり、①見返しに「浪華書林明倫堂（塩屋卯兵衛）／積小堂（河内屋新次郎）合刻」とするもの、②さらに裏見返しに「嘉永七年新刻備中国大絵図」の河内屋喜兵衛の広告を貼付するもの、③やはり裏見返しに「三都発行書肆」として、江戸・須原屋茂兵衛、同伊八、山城屋佐兵衛、岡田屋嘉七、京都・藤村治左衛門、大坂・秋田屋太右衛門の計6肆の奥付をもつものである。このように、大坂板に何種類かがあるところからも、先ず、寛政からしばらくの間に藤屋が繰返し増刷し、その後、河新・河喜・秋太らに求板されたものと思われる。河新板にはさらに別本もあり、それには「浪華書林 売払 北久太郎町／河内屋新次郎」と記し、蔵板ではなく売払のみの時期があったことを示唆するだろうか。また、これら『万国新話』の後印本には、本来の甫周・玄随・良庵という序文の順序ではなく、良庵・甫周・玄随や玄随・甫周・良庵、さらには甫周と玄随の序文の中間部1丁が入れ替わったものなど、実にさまざまな順序で3つの序文を並べた本が存在する。いずれも、それだけこの本が広く長期間にわたって販売され、流通したことを示しているだろう。ちなみに、河新については、彌吉光長氏に「大坂商人の典型」と副題した「河内屋新次郎」の一文があって（『未刊史料による日本文化史』第2巻）、その実利的な業務や人物の詳細が知られる。ただし、上に見る諸板など、その「反則で儲けようとする狡猾さ」（彌吉氏）の発露であった可能性もある。

「相」は相板の印であり、近平（備後町・近江屋平助）板との相板を意味するものと思われるが、『万国新話』の河新・近平相板は管見に入らない。相板で申請したものの、近平に何らかの支障が出来て、実際には河新の単独板となったものか、あるいは近平の負担分が軽く、その名が奥付等に記されなかったということなのであろうか。藤弥への求板後も「株帳」の記載は河新のみが削除されて近平はそのままであり、いずれも、その間の事情は不明である。

さて、「株帳」では、これら（『紅毛雑話』『万国新話』）が後出の『日本地名便覧』と同様「地理之書」の中に含まれ、『難波鑑』や『長崎紀行』などに続き、『東遊記』『西遊記』や『河内志』などの前に出てくることから、一般の目からは「名所記」や「名所案内」の類と考えられていたことが窺われる<sup>53)</sup>。確かに、これらの海外情報本は、その対象地域は随分遠方ではあるが、「名所記」の仲間と考える見方も存在し得る書物であった。

一方で、藤弥板の巻末に載る「星文堂蔵書目録」には、『万国新話』の惹句として、「画図ヲ交ヘテ万国ノ珍説ヲ委クノブル」と記されており、この本が、一般に「珍説」の開陳本という受容の仕方もされていたことを如実に示している。

ところで、江戸から流出した板木（本）を検討していくと、板木（本）が江戸から大阪へと移動することによって、その内容に関する禁忌感が弱まる傾向にあるという印象を受ける<sup>54)</sup>。たとえば、おそらく漂流記への言及などによって些かの不都合を生じたと思われる『万国新話』や、内容的にそれに準ずる『紅毛雑話』が、江戸での大きな需要が予想されるのにもかかわらず比較的是やく上方に移動し、その後長く上方で板を重ねた背景に、そのような事情が反映していなかったとはいえないのではないか。

それは、最も監視の目が厳しい江戸を離れることによる禁忌感の弛緩、江戸対大坂という単純な図式化をすれば、武士人口が過半を占める将軍のお膝下としての江戸と、武士人口の構成率の極端な低さを初めとする理由によって半ば自由都市の趣きを呈していた大坂という対比によるものであろう。

このような局面を、中良の著作のみならず、蘭学関係の諸書はしばしば垣間見させるのであり、出版システム（「出勤帳」の言葉を借りれば「本商売」）の地域特性、地域偏差を知るための一助となる。

### 3) 琉球談

『琉球談』は、『大坂本屋仲間記録』に収められた仲間記録のいずれにもその名を見出せないが、ここでは例外的に取り上げておきたい。

「板木総目録株帳」に『紅毛雑話』『万国新話』が掲出されながら、『琉球談』が見えないのは、ただ単に大坂に求板されなかったからであらうか、それともここには、『琉球談』

53) 先に、『紅毛雑話』の改題本が『名所／図会 阿蘭陀紀聞』と名づけられたと記したが、まさに、以上のような事情を反映する命名である。ところでこれは、大坂に特有の現象であらうか、それとも江戸でも同様であったか。または、「名所記」の流行により、その中に取り込まれてしまったということなのであろうか。検討を要する問題であらう。

54) 江戸で差し構えられた本や、江戸での板行に差し障りの予想される本が、大坂で板行されている事例を指摘できる。その細目と考察は本稿の任を超えるため、別に考察の機会をもちたい。

が販売の差し止めに遇ったという事実が反映しているものであろうか。本稿で検討するように、上方に求板された他の中良の著作は、皆大坂に求板されているだけに、『琉球談』のみ京都で板を重ねるという事情が目立つのである。

ただし、『琉球談』が当初江戸から大坂に移動し、そこで板行されたのではなく、それが京都の書店へと板木が移るに至ったことで、どのような享受の差異が生じたかは、ここでは論ずる用意がない。

諸本によって知られる限り、寛政7（1795）年には、『琉球談』は京都で板行されるに至っている。寛政7年6月の林伊兵衛板が最初であり、いずれも刊年不祥の橋屋嘉助板、石田治兵衛板と続く。「株帳」は、京都の書肆名は大坂の書肆との相板の場合のみ掲載することを原則としており、『琉球談』の記載はない。ただし、このことは、『琉球談』が京都に留まったことを示す徴証とはいえず、所見の限りで最も時代の降った『琉球談』の板本は、無刊記ではあるが見返しに『真字引玉篇大成』の貼付広告を貼付した「大坂心斎橋南四丁目 吉文字屋市右衛門」の板である。すなわち、『琉球談』が最終的に大坂へと求板されたことを確認できる。

前稿（114頁20行から115頁36行）では、「出勤帳十番」に載る河内屋八兵衛・山口屋又一連名の「覚」を基にして、『琉球談』は当初江戸から大坂へ求板される予定であったと推論した。ただし、この「覚」は『琉球談』が江戸の須原屋市兵衛が開板したところ京都の林伊兵衛より「差構」があり、須市と林伊との「対談」が済むまで「売留」を申し出たことを京都の行司より通告してきたため、大坂の本屋仲間に対してなされた『琉球談』の板木を「売買」しないようにとの河八・山又連名による忠告ととる方が妥当であった<sup>55)</sup>。これは、回状か張り紙の類、あるいは「出勤帳」に言うところの「売留触下げ札」であったのだろうか。したがって、前稿のうち『琉球談』が当初大坂へと求板される予定であったという推論の部分に関して、これを撤回したい。したがって、この推論に基づく論述を削除させていただきたい。

林伊兵衛の「差構」は、そこで述べた通り『中山伝信録』重板への嫌疑に基づくものと思われる。大坂・京都いずれの記録にも、「差構」以降に『琉球談』への言及はなく、もとより重板の記録もない。さらに、当の林伊が『琉球談』を求板しているということは、結果的に重板とは認められなかったことを示している。重板とされれば、板木は破却、残り本は焼却が課されるのが常であった。その後、『琉球談』は寛政7（1795）年6月の林伊兵衛板をはじめとして、京都の書店に繰り返し求板されている。最初の京板であったはずの林伊兵衛板の奥付は、「寛政二年刻成／同七年卯六月求板／皇都書林 二条通柳馬場東江入／林 伊兵衛」という念の入ったものであり、なお同じ奥付に『中山伝信録』（と『通俗漂海録』）の蔵板広告を載せる。明らかに出版に関わるトラブルを意識し、回避しようという配慮である。すでにこの時点で、江戸板の板元である須原屋市兵衛によってこの書成立の背景が書かれた跋<sup>56)</sup>が削除されているのは、当然の処置であろう。

55) 「済帳表目」（彌吉光長『書誌書目シリーズ 未刊史料による日本出版文化』第1巻、ゆまに書房、1988年による）には、「寛政二年戌九月より亥正月迄」の条に「江戸須原屋市兵衛殿出版琉球談差構ニ付林伊より口上書出、江戸取合一件之写」と見え、大坂の本屋仲間は介在せず、江戸（須市）と京都（林伊）との間での交渉であったことを示す。ちなみに、京都側の記録に上る中良の著作は、この『琉球談』のみである。

須原屋市兵衛板より他の江戸板を見出せないことから<sup>57)</sup>、おそらく寛政2（1790）年12月の「差構」からしばらく後に須市の板行は再開され、その後林伊に求板されるまでの約5年間、『琉球談』の板木は須市の手元にあったものと思われる。

林伊兵衛以後の『琉球談』の板木の移動は、これもまた無刊記本が多く把握しにくいだが、その板面から見て、林伊のところで板を重ねた後に、京都寺町姉小路の橋屋嘉助<sup>58)</sup>、さらに一条通大宮の石田（升屋）治兵衛に求板されたものと考えられる。後者は、本来の一冊本を上下二冊に分冊した（それも分け目が「女市」の項目の途中という不用意な）もので、題簽には「琉球談」ではなく「琉球はなし」と記される。同一の板木であることは間違いないが、かなり疲れた板木であり、幕末期のものであろうか。やはり須市の跋を欠く<sup>59)</sup>。

以上のように、『琉球談』の出版と差構に関する詳細については、現在のところ不明の部分が多い。さらに後考を期して、訂補の文章を用意したい。

## (5) 教訓本

蘭学社中の戯作者という従来のイメージ<sup>60)</sup>から見れば、森島中良が教訓本を著すということは意外な事蹟に属するかも知れない。しかし、寛政改革時にその先導者であった松平定信が藩主をつとめる白河藩に仕官した頃から<sup>61)</sup>、中良の事蹟には、天明期の戯作者・狂歌師としてのイメージのみでは捉えきれない、一見それに背馳するような言動・事蹟が次第に増え始める。

以下に見る教訓本『鄙都言種』の執筆も、そのような行為のひとつとってよいだろう<sup>62)</sup>。ただし、『紅毛雑話』『万国新話』『琉球談』といった一般向け海外事情叢書の諸書を刊した須原屋市兵衛が伊勢屋半四郎との相板で板行したこの教訓本は、全体的には寛政改革の理念に応じた幼童啓蒙のための倫理教訓譚に満ちていながら、その実、和漢の古典の中に教訓・啓蒙に関わるエピソードを博搜し随所で読書や尚古の楽しみを説いた、いか

56) その手慣れた文章の様子から、著者中良の代筆の可能性も考えられると述べた（拙著『万象亭森島中良の文事』第5章第1節、寛政2（1790）年9月の条）。しかし、須原屋市兵衛の教養に照らして、これが須市の文章であっても何の不思議もない。須市の事蹟に関しては、今田洋三氏の『江戸の本屋さん』（日本放送協会、1977年）に、風間誠史氏による新視点からの紹介の文章（「本屋列伝・須原屋市兵衛」『国文学』1997年9月号）が加わった。

57) 『国書総目録』に登載される『琉球談』の寛政3年版及び同9年版については、未確認のため、本稿では言及を控えた。

58) 其編纂委員会編『出版文化の源流 京都書肆変遷史』（京都府書店商業組合、1994年）に従えば、橋屋嘉助の営業は文化年間から文政年間であり、この間の求板であっただろうか。

59) 須原屋市兵衛の跋文は回復せず、おそらくその板木はすでに林伊のもとで消滅したものと考えられる。なお、石田治兵衛は明治期までの営業が知られている。注58)の『京都書肆変遷史』など参照。

60) そのような中良のイメージ形成には数々の書が関与しているが、中でも小野忠重編『紅毛雑話』（双林社、1943年）付載「森島中良雑考」、岡村千曳著『紅毛文化史話』（創元社、1953年）二書の果たした役割が大きかった。

61) 先述、大槻如電編『新撰洋学年表』（私家版、1927年。柏林社版、1963年）の記述に従う。

62) 拙著『森島中良集』（国書刊行会、1994年）解題参照。なお、十八大通の一人にも数えられるほどの中良の通人的なふるまいについては、拙著『万象亭森島中良の文事』（翰林書房、1995年）第1章第3節の3「文人桂林裔」に詳述した。



にも通人中良らしい書物なのであった<sup>63)</sup>。『徒然草』以来の「随筆」の系譜を引くことを「人言（ひとこと）草」という外題で表明しつつ<sup>64)</sup>、同時に教訓本として著名な石田梅岩の『都鄙問答』の外題表記を意識したことが明らかな『鄙都言種』は、その意味で教訓本というよりも、むしろ随筆もしくは啓蒙随筆と呼ぶのがふさわしい書物であった。

### 1) 鄙都言種

文化改正「板木総目録株帳」第七冊（「教訓読本」の部）には、『教／訓 鄙都言種』（寛政8（1796）年正月、伊勢屋半四郎・須原屋市兵衛刊）が載る。

- ⑦ 〈改正〉教訓鄙都言種 二 相<sup>65)</sup>（削除）〈カギ・改正〉扇理 〈改正〉今辰  
 ○〈傍線・明〉 今辰 〈新正〉河源  
 〈改正〉同二篇 二 相（削除）〈カギ・改正〉扇理 ○ 今辰  
 ○〈傍線・明〉 今辰 〈新正〉河源

『鄙都言種』は、大坂では「扇理」（扇屋理助）、「今辰」（今津屋辰三郎）、「河源」（河内屋源七郎）の関与によって出版されたことになる。百貫町の扇屋理助（利助とも）のもとに求板されたものが最初の大坂板であったことは、「新板願出印形帳」（『大坂本屋仲間記録』第14巻）、「開板御願書扣」（同第17巻）によっても確認できる<sup>66)</sup>。そこから今辰へ（あるいは「相」とあるので扇理と今辰の相板）、そしておそらく今辰の単独板を経て、河内屋源七郎へと移動したものと思われるが、扇理板・今辰板いずれも単独板は管見に入らない。

本書もまた、かつて考察したように、教訓本の体裁をとりながら、その「方法」においては考証随筆に近いものであった<sup>67)</sup>。和漢の典籍の中から、啓蒙・教訓に関する逸話を集め<sup>68)</sup>、豊富な図版を添えて、ただしおそらく早卒の間に編集したものである<sup>69)</sup>。

63) 拙著『森島中良集』解題参照。

64) 近世初期に繰り返し板行された『徒然草』は、おそらく近世期において最大頻度で引用（文句取り・パロディなどを含め）された書物であった。そのことを反映してであろう、教訓本・啓蒙本には連綿と「何々草」という外題をつける慣例が続いた。そのほんの一例を挙げれば、『諫草』（宝永3（1706）年刊）『やしなひ草』（天明4（1784）年刊）『力草』（寛政12（1800）年刊）『喩草』（文化6（1809）年刊）『心学心得草』（文政9（1826）年刊）など、とりわけ近世後半期を通じて枚挙に暇がない。その流れは維新期の翻訳啓蒙書『童蒙をしへ草』（チャンブル著・福沢諭吉訳）などを経て、近代の類書にも流れ至っている。

65) 「相」は相板・相合板を示す。これが、後にバツ印で削除されているのは、相板から単独板（この場合には、扇屋理助・今津屋辰三郎の相板から今辰の単独板）へと変わったことを示しているものと考えられる。

66) 前者に「一人言艸 二篇 全二冊／作者 布屋町 丹波屋西左衛門／開板人 百貫町 扇屋利介」（享和元（1801）年9月）、後者に「下り月日奥書有／一人言種 全部二冊／後編 半帋本（以下、「利助」を除いて同じ）」（享和元年7月）と記されている。7月の「開板御願扣」の方が実態に近いところにいささかの疑問が存するが、すでにこの時期には原稿が完成していたことは間違いない。

67) 拙著『万象亭森島中良の文事』第2章第5節「中良は国学者かー『桂林漫録』『鄙都言種』『見聞雑誌』を対象としてー」参照。

68) 寛政期に至り、江戸蘭学への当局よりの規制が厳しくなり、江戸蘭学者たちが危機感を感じる中で、中良がそれに呼応して啓蒙活動に意を砕いたであろうことについては、注38)の拙稿『『類聚紅毛語訳』成立の背景』に詳述した。

69) 注67)の拙著にて考察した。そこでは、内容的に関連する書目を掲げ、また、「この書自体の形態が、殆ど『絵本』と怪しい」と記した。実際そのレイアウトは、『絵本故事譚』（正徳4（1714）年刊）などとの関連を思わせる。

「出勤帳十三番」(『大坂本屋仲間記録』第2巻)には、寛政8(1796)年4月8日の「寄合」に「人言草」の「添章出す」との記事が見え、この折りに大坂の本屋が初めて関与したことが分かる。江戸板初印本から4ヶ月後のことであった<sup>70)</sup>。ただし、奥付に、「書林 今津屋辰三郎／扇屋利助／吉野屋新助」と見える板は「寛政八年正月」の刊記をもち、これは明らかに事実と反する。おそらく、数カ月のタイムラグは無視できると踏んだものであろう。また、この最初の大坂板に吉新が加わっていたことがわかる。同板には「撰陽書林 野上千里 亭蔵書目録」とした扇屋理助の蔵板目録を付し、仲間記録の通り、扇理主体の蔵板であったことを示している。本書には江戸須原屋茂兵衛の後印本があり、これは、寛政4(1793)年4月には大坂に板木が求板されていたというのであれば、同年正月から4月までの求板ということになる。このはやは、板行以前から、須市から須茂への求板が織り込まれていた可能性を窺わせる。

「出勤帳十八番」(同前)には、享和元(1801)年7月5日の寄合に「一言艸、買板部納ムル」と見え、この折りに江戸から大坂に完全に求板(購入)されたことを意味するであろうか。続く「出勤帳十九番」(同前)には、「人言艸後編」の添章が享和2(1802)年11月5日の寄合で出され、続けて「上ヶ本」(上げ本)を同月20日に上呈している。5日に惣会所(年寄金谷与左衛門)に出版申請書を提出し、20日に審査用見本を添付したということになる。これらの記載事項から、おそらく前編の求板が後編嗣出の呼び水となり、その後1年余りをかけて後編が成立し、翌年末頃に出版されたという背景が窺われる。ちなみに後編の奥付は「享和二年九月」の刊記と「浪花書林 扇屋利助／今津屋辰三郎」の板元名を有する。

その後、先に見た通り、『鄙都言種』の板木は天保頃には河内屋源七郎のところに存在した。先の引用に見る「河源」である。「株帳」に「新正」とあることから、遅くとも文化末年頃から、この本の板木(前編・後編とも)は、以下に見る如く弘化頃に伊丹屋善兵衛に求板されるまでは河内屋源七郎のもとにあったと考えればよいだろうか。

ところで、これも先に触れた「軍書小説類蔵板目録」の、

森羅子の著作にて、蕙斎子の画。後編ハ玉山子の画なり。黒田如水の定書をのせ、古の質素を示し、紀正盛朝臣の物語り、蒲生氏郷朝臣九歳の時籠鶯を放させし事、黒田老侯如水の慈愛、福島正則が土を愛せし美談等、すべて四民万の心得となる事也<sup>71)</sup>。

70) ちなみに、4日後(4月12日)の寄合で、『鄙都言種』の巻末広告に載る『五常弁』の添章が出されている。同書もまた須市(江戸)から須茂(江戸)へという経路を取ったあと、大坂に求板されたものか。この点は、逆に『鄙都言種』の移動経路を示唆する如くである。

71) 当該の文章は句読点を一切欠くため、引用に際して句読点を補った。ところで、この広告文を読む限り、前編とともに後編もまた「森羅子の著作」ととれる。河内屋源七郎板であるか否かは不詳であるが、前編の中(表紙及び序文)に後編の本文をもち、後編の中に前編の本文をもつ本が複数存在し(したがって、読者の改裝の折りの錯巻ではない)、これらは、予想される①板元の錯誤による錯巻、②板元の前後編とも森羅子の作と見せかけようとする作為、という二つの可能性において、先の広告文の示唆するところと端無くも一致する。それらの内題は前編・後編ともに「鄙都言種」(冒頭)「人言草」(巻末)であり、とりわけ前編のあることを知って編まれた後編が内題に「後編」を謳わないことは、前編本文と後編本文の逆転が単純ミスではなく意識的なものであったことを示唆する。後編の著者樗牛道人は、注66)の両記録によれば「丹波屋西左衛門」という通称が知られ、大坂の人であろう推測されるのみで無名人であり、販売元としては、蘭学者として、また平賀源内門人の戯作者として著名な森島中良の作と見せかけることで利益が増すと踏んだのではないだろうか。

といった惹句の書き振りを見る限り、また両書が、同じ作者の本は極力並べて記載する傾向のあるこの「軍書小説類蔵板目録」で並べて記載されなかったことを考えるならば、おそらく河内屋源七郎は、「森羅子」編の『鄙都言種』と「桂川中良」編の『桂林漫録』とが同じ森島中良の著作であることを理解していなかったものと思われる。

前者は既述の通り当初須原屋市兵衛から刊された。後者も先述の如く桂林舎蔵板であったものが、須原屋市兵衛か須原屋茂兵衛辺りに一旦板木（版權）が移り、そこから大坂に移動したものと思われる。そしてそれらは奇遇にも合流し、この二つの中良著作はかなり長い間、大坂は心斎橋筋北久宝寺町の河内屋源七郎のもとにあったことになる。ただし『鄙都言種』は弘化頃（求板年・刊年未詳）には、同じ筋（南久宝寺町心斎橋北へ入ル）の伊丹屋善兵衛に求板されている<sup>72)</sup>。『桂林漫録』の伊丹屋善兵衛板は未確認であるが、あるいは同時に移動したものであろうか。ともあれ、両書の板木は、おそらく同じような運命をたどって消滅したものと思われる。

『鄙都言種』は、中良の著作の中でも比較的上方色の強いものであった。それは、先の「蔵板目録」の惹句のように集約され得ることが示している通り、上方を中心に逸話の残る時代に材を多く採ったからであった。これは、『鄙都言種』が上方で板を重ね、後編までもが用意されるに至る大きな要素となったであろう。

## (6) 地誌

森島中良の資質のひとつとして、地理的な感覚の鋭さを挙げることができるだろう。それは、世界地理に関して広く知られるところであり、たとえば中良の後世へのイメージを定めた略伝のひとつである『百家琦行伝』（弘化2（1845）年刊）は、「胸中数万巻の書を秘めおき、世界を我が家のうちの如く看なしたりしとぞ」などと記している<sup>73)</sup>。勿論実際の海外旅行が不可能であった時代に、中良は諸々の書物・資料によって世界中の情報を知り、想像力を杖に世界を旅した人であった。

このような趣味への傾倒を、彼の言葉によって述べるところを探すならば、たとえば『海外異聞』正編（寛政元（1789）年成）序文の一節は、最も雄弁にそれを語る一例といえるだろう<sup>74)</sup>。

いでや行きも通はぬ異国の土風を、其の人に聞かずして耳に親しく、踏みも渡らぬ山川を、みづからたどらずして目に見るが如くならしむるものは、彼の西海の艾儒略が『職方外記』、龍溪の張燮が『東西洋考』等の諸書をおきては、大海原に舵楫を失ひて外国に吹き漂はされたる船人等が物語に及ぶもの有らじと、爰の秘冊、彼所の蔵書をあなぐり需め、獲るがまにまに書き集むれば、はからず一帙の書となりぬ。木風はしたなう吹き進む

72) 管見の限り、最も時代の下った板である。無刊記であるが、奥付に「繡像復讐岩見英雄録」（『絵本岩見英雄録』）の広告があり、これは弘化元（1844）年の刊であるから、この前後に板行されたものと考えられる。なお、伊丹屋善兵衛は伊丹屋一統の本家で前川氏。河源も前川氏であり、何らかの縁故関係にあったか。

73) 小野忠重『紅毛雑話』付載「森島中良雑考」参照。

74) 引用は、現存諸本中、最も原撰本に近いと判断できる穂久邇文庫本に従い、振り仮名や句読点を補った。

秋の夜ごろ、鐘礼の雨の窓を打つめる冬の日に、独り読み独り玩ぶは、一段の奇快、以て人に語りがたし。実に陳留の謝在杭が、「未だ曾て見ざる書を読み、未だかつて至らざる山水を歴れば、至宝を獲、異味を嘗るゝ如し」と云ひけるも味わひあるかな。

ここで中良は、専ら漢籍を引き合いに出しているが、そのような趣味・関心は国外のみならず国内にも注がれ、彼の日本地理への素養は並々ならぬものがあつた。その片鱗は、『桂林漫録』『見聞雑志』といった考証随筆の類や、あるいはメモ・草稿のまま残された書留帳の随所に窺うことができる。

地理への関心は、たとえば中良編・北尾政美画の『絵本吾嬬鑑』（天明7（1787）年刊）という江戸名所絵本などにも揺曳し、とりわけ江戸の地名を相撲の取り組みに見立てた付録「江戸名所取組」は、戯作でありながら中良の地名に対する知識の豊かさと関心の深さを示して余りあるものであつた。

以下に見る『日本地名便覧』は、現存不明で、その内容を明らかにすることができないが、そのような彼の素養を十全に発揮して編まれたものと考えられる。

## 1) 日本地名便覧

文化改正「板木総目録株帳」第六冊（「地理之書」）に、次の項目が見える。

⑧ 〈改正〉 日本地名便覧 折本 〈カギ〉 播本 〈審〉 近定

本書は、すでに寛政改正の「株帳」第二冊（「故事 地理／随筆」）にも、

日本／地名 便覧 両面摺／折本 尼与（削除） 播元

と見え、「播本」（播元）、すなわち播磨屋本三郎（元三郎とも）の前に、「尼与」（尼屋与兵衛）の手元に板木が存在したことが知れる。おそらくこれが最初の大坂板であつた。その後、播磨屋本三郎を介して、「近定」の手にわたつたことが確認される。時間的には、寛政2（1790）年までに尼与、続いて播本、文化頃に近定へという経路であつただろう。「近定」は、文化期前後の営業状況、出版物の傾向という二点より、曾根崎村の近江屋定次郎ではなく、立売堀四丁目の近江屋定助と思われる。

現在までその存在が報告されていないのにもかかわらず、「割印帳」（『享保／以後 江戸出版書目』）に載り、書林広告（須原屋市兵衛板『琉球談』寛政二年初板付載「森島中良先生著述目録」）に「既刊」として掲載されるなど、ほとんどその板行されたことは間違いないと思われた『日本地名便覧』であつたが<sup>75)</sup>、上の「板木総目録株帳」の記述によって、この本の存在はほぼ確実に確認されることとなる。そして、寛政元（1789）年に江戸で開板されたはずのその板木は、おそらく翌年には尼屋与兵衛、文化8（1811）年9月以降に播磨屋本三郎<sup>76)</sup>

75) 拙著『万象亭森島中良の文事』第5章第1節「万象亭森島中良年譜（稿）」寛政2年の条など参照。

に求板され、さらに近江屋定助へと求板されたわけである。

また、この点より、この本の内容が、江戸だけではなく大坂で出版されても用に足るものであったことが判明する。すなわちそれは「日本／地名／便覧」というタイトルに恥じぬ内容をもつものであったということであろう。はたしてそれは、どのような内容（アイデア）の便覧であったらうか、以下にいささかの推測を試みたい。

先ず、見過ごせないのは、『万国新話』巻末（これは、全く同文で『琉球談』巻末の「森島中良先生著述目録」にも掲げられている）の「大日本地名便覧／既刻 両面摺／都城陣屋神社仏閣新古の名所并ニ其地の名物等を分チて見安く記す連歌俳諧の席遠遊旅行の人懐にすべき書也」との広告文である。

また「折本」という点からは、上に「遠遊旅行の人懐にすべき書」と言う通り、それが旅行用、携帯用であったことは確実であろう。この点は、寛政2（1790）年改正の「株帳」や、『琉球談』初印本に付載された「森島中良先生著述目録」の「両面摺」という記載事項によって、さらに補強される。思うに、大き目の一枚（両面）摺を折り畳み、その一面に簡易な表紙をつけたものが、この『日本地名便覧』の形態ではなかったらうか。

また、「著述目録」には「分チて見安く記す」と記すのみであるが、「地名便覧」というところからは、たとえば「いろは順」のような形で早引き検索が工夫されていたのであろうか。あるいは、「両面摺」の「折本」ということから、地図（概念図）が描かれて地名との対応がはかられたものであったか。いずれにせよそれは、中良が自らの旅の途中にさまざまに工夫した結果、考案されたものであったらう。

ちなみに、類推されるような携帯本の成立・販売は、ちょうどこの頃から日本全国を股に掛ける公私の大旅行家が出現してくることと合致する。街道筋を中心にそのような需要を支えるインフラが整備され、そのことでまた新たな需要が発生したのである。あるいはまた、こういった本の出版・流通・普及が、次代の幕末における「お伊勢参り」に象徴される国民総旅行家現象を下支えすることになったとも言い得るであろう。

さらにその内容を類推するために、中良はどのような先蹤作を意識してこの便覧をつくったのかと問うことができるだろう。ただしこのような問題設定が無意味である可能性もある。というのは、中良は常にその人生観として新味を重んじ、とりわけその著作において先人の糟糠を嘗めることを忌み嫌ったからである<sup>76)</sup>。この人物によって、全く前例のない（少なくとも、前例を超越した）オリジナルな本が成立した可能性が高いと言い換えられるだろう。その意味では、逆に中良の『日本地名便覧』を参考にしてつくられた影響作を探した方が有効であろうと思われる。それは、たとえば『各国／所領 万国地名捷覧』（嘉永6（1853）年刊）のようなものであったらうか。

この本が、その名の通り「日本」全土を対象としていたというのであれば、地理・地名に対

76) 寛政改正の「株帳」では「播元」（「播本」「播元」両様の表記を用い、同一人物である）。ただし、これは後からの補筆と考えられる。「出勤帳二十六番」文化8年9月11日寄合の条に「車町播磨屋本三郎加入触相認メ候事」「車町播磨屋本三郎義、此度仲間加入被致候事」など見え、播磨屋本三郎の大坂本屋仲間への加入は、これ以前には溯り得ないからである。文化改正の「株帳」は、その播本を鍵印で抹消し、近定への求板がなされたことを示している。また、寛政改正「株帳」が後の書き込みであったとしても、播本が天保5（1834）年に「相退」（廃業）しているところから、播本から近定への求板はこれ以後ではあり得ない。

77) 拙著『万象亭森島中良の文事』第1章など参照。

する中良の素養の深さ、知識の量を、これまで以上に重く見積もる必要が出てくるであろう。とともに、おそらく類書を超えたその存在からは、この地名便覧が成立した寛政初年までの間に中良の広い範囲にわたる行脚があったと考えておく必要が、より現実的に派生することになる。そうであれば、たとえば洒落本『真女意題』の定評ある仙台弁も、あるいは同じく『田舎芝居』の越後弁も<sup>78)</sup>、参勤交代の藩士や当地出身の江戸者に教えを請い、確認したというような成立の背景ではなく、実際に足を運んで仕入れた方言である可能性が浮上してくる。そして、もしこの推測が当たっていたのであれば、むしろ彼の「方言描写」は、その体験（広範な行脚）の表明の役割をも果たしていた可能性がある。

これは、戯作執筆以外にその事蹟がほとんど知られていない天明期以前の中良の経歴に関わることであり、かなり重要なポイントとなってくるだろう。さらには、寛政期の白河藩致仕後の遊歴のイメージが、その全生涯に及ぶということになり、そうであれば、彼はまさに「旅の人」とさえ呼べるような人生を送ったことになる。これは森島中良の生涯に関する、これまで言われて来なかった新たなイメージであろう<sup>79)</sup>。

以上のことから、改めて、彼の「旅」に関連する可能性をもつ事項をその遺文の中から洗い出すこと、特に現存資料の中では中良自筆の書き留めを再検討する必要があるだろう。その意味では、「万象随筆」中の一冊「紀行」の位置付けなどは、差し当たって重要な課題となってくるはずである<sup>80)</sup>。

## (7) 戯作本

最後に、戯作本について見ておきたい。

「板本総目録株帳」には、「双紙読本」の項目中にこの分野の記載がある。「双紙読本」とは耳慣れぬ呼称であるが、「教訓読本」と並立する、草紙類の謂いと考えておけばよいだろう。ただし「双紙」は草紙屋の扱う草双紙を原則的に含まず、むしろ浮世草子などを含み、読本は所謂読本のみならず、滑稽本・怪談本など広く、さらには文芸ジャンル以外をも含む。もちろん、これは当代の一般的ジャンル意識に沿った分類であった。

### 1) 田舎芝居

本書『田舎芝居』（初板天明7（1787）年、鶴屋喜右衛門刊）は、おそらく中良の戯作本の中でも従来最もよく知られ、読まれたもののひとつであろう。

#### ⑨ 〈改正〉田舎芝居 藤徳

78) 『真女意題』の方言描写については、東条操「洒落本に現れたる方言の考察」（『近世文学の研究』至文堂、1936年）参照。『田舎芝居』のそれについては、近年の中良研究における重要な成果のひとつである、滝沢栗男「万象亭作洒落本『田舎芝居』成立考—その地理と歴史的背景—」（『游星』21号、1999年）によって、実際の越後弁とは大きく異なることが指摘されている。

79) 「旅の人」としての中良については、拙著『万象亭森島中良の文事』の第1章などで簡単に触れた。その後、注38)の拙稿『『類聚紅毛語訳』成立の背景』で中良の長崎行を考証した。

80) 本稿の「3. 稿本補遺」（後出）参照。

すでに寛政2（1790）年改正の「株帳」にも、同じ記載形式で「田舎芝居」の書名は見えるものの、おそらくそれは後の補記であって、これは、当初洒落本の通例である小本型で板行された本書が、後に半紙本型に改板されたがゆえの登載であったはずである<sup>81)</sup>。半紙本型の『田舎芝居』は、享和元（1800）年の7月に大坂凌雲堂と江戸千鶴堂との相板で刊行されている。しかし、前稿で考察したように、実在の門人であった二代目竹杖為軽と森羅亭万倍との掛け合いのほめ詞を「竹杖万倍」という実在しない人物一人のほめ詞にするなど、この改編は中良以下、彼の門人も預かり知らぬものであったと考えられる<sup>82)</sup>。「千鶴堂」を称しつつ、これが『田舎芝居』初板の板元である鶴屋喜右衛門であったかどうかは不明であり、実のところ怪しいと言わざるを得ない<sup>83)</sup>。

また、享和元年以降にも『田舎芝居』の元板を用いた本は刊されていたのであり、すなわち「板木総目録株帳」に記載された本の中にも、重板である可能性の高いものが入っていたことになる。これは、江戸と大坂の距離ゆえに発生したことであっただろうか。それとも当初小本であった（割印などの自主検閲の網にかからない、いわば「制外」の本であった）本が改板時に半紙本の形態をとることで、例外的な事態を生じさせたのであろうか。「板木総目録株帳」文化改正本の凡例には、次の一条が掲げられている。

一 草紙もの類其外株ニ不相立板目録不当載義ハ勿論の事ニ候但シ草紙屋ニて太夫ものと唱候類や尤ちんかう記七ツいろは実語教今川商売往来古状揃等以て抜摺等大抵摺形ハ株帳ニ書載候半紙摺形にても首書或ハ注抄入有て板木は株立候故書載置候依て向後世利分市ニて板木買取申出候共其心得ヲ以株帳へ書載可申事

ここでもやはり草紙屋の出す「草紙もの（物）」は株を立てず、よって目録から除外するとの姿勢である。しかし、その中にも例外はあり、ここでは太夫物（正本などであろう）や教科書類（塵功記・七ついろは・実語教・往来物・古状揃など）を掲げている。さらに抜刷や、首書・注記・抄書の入った類は記載するとの姿勢である。そしてその登載を分ける大きな目安は、ここでも半紙本形という書形如何であった<sup>84)</sup>。

中良の「戯作」に関しては、「板木総目録株帳」の中には、上記『田舎芝居』の登載があるのみである。しかし、これにしても『田舎芝居』初板の板木が大坂へ移動した例ではなく、半紙本への改板という例外的な条件を介してのことであった。このことはまた、江戸の地本と

81) 小本型の小冊は、「株帳」は原則的にこれを除外している。また、文化改正の「株帳」に至って「遊里」という形でわずかな洒落本をも収めるが、それらは談義本系統、すなわち半紙本型の洒落本を主体とした。いずれにせよ、寛政改正の「株帳」が「双紙読本」として、当初の小本型『田舎芝居』（天明7年刊）を載せたとは思えない。

82) 『洒落本大成』第13巻「田舎芝居」解題（浜田啓介氏執筆）及び拙著『万象亭森島中良の文事』第3章第4節参照。また、『田舎芝居』に関しては、『新日本古典文学大系』第82巻の「田舎芝居」解題（中野三敏氏執筆）も参照のこと。

83) 鶴屋喜右衛門の堂号は「仙鶴堂」と書くのが普通であったが、「千鶴堂」とした例もないわけではない。また、もう一方の「凌雲堂」は、「藤徳」（藤屋徳兵衛）の堂号であろうか。もしそうであったならば、この改板もある程度信頼のおけるものということになり、また相板元の「千鶴堂」が仙鶴堂鶴屋喜右衛門であった可能性も大きくなる。しかし「株帳」（文化改正）は大坂の書肆同士の相板、あるいは京都の書肆との相板は記載するものの、江戸の書肆との相板は記載せず、藤屋が凌雲堂を名乗った事例も管見に入らない。

しての洒落本や黄表紙をはじめとする「戯作」の板木が、原則的に江戸を離れることのなかった事情を示すであろう<sup>85)</sup>。

ただ、所謂「戯作」の中で、読本に関しては、江戸読本の多くが上方に求板され板木の移動があったことが明らかになっている<sup>86)</sup>。文化改正の「株帳」にも、「草紙読本」の欄に多くの江戸読本が記載されている。その点に関して専ら活躍した書店が存在するほどであった。需要が見込めるという点はもちろんあっただろうが、またおそらくは半紙本型であるという書形の与かるところもあって、読本は他の「戯作」類とは異なり、その板木が上方に移動することが多かったものと考えられる。また、そもそも上方発祥の読本というジャンルを受け入れる素地も、依然大きかったのであろう。描かれる舞台が、あえて江戸を避ける場合が多く、また、基本的に時代物である読本の世界が多く歴史上の事件にもとづくため、その舞台が上方であることが少なくなかったという事情も、そこにはおそらく反映しているはずである。

## 2. 未刊本について

### (1) 『琉球談』巻末予告の実態

前稿にても触れたことであるが、『琉球談』（寛政2（1789）年9月序・跋、須原屋市兵衛刊）の巻末には、「森島中良先生著作目録」と銘打って近刊予定の書目が掲げられている。その中のいくつかについて、補足しておきたい。

これは、『万国新話』（寛政元（1788）年11月刊）の「森島中良先生著述書目」の増補版とでも呼ぶべきものであった。ここには、

西洋奇譚 近刻 全五冊 先に行れたる紅毛雑話の後編にして初編にもれたる事を記し  
彼邦にて用ゆる武具馬具乃図式を附録す

万象雑組 同上（近刻） 全十冊 天文地理をはじめ万国の内にあらゆる事実を載并に  
本朝の故事古言に至る迄部を分ちて見安く記す

万国新話 次編 追刻 欧羅巴州乃部 全五冊／亜弗利加乃部 同上（全五冊）／阿

84) 書物と草紙に「板株」の差は明確に存在した。ただし、それらが錯綜する場合があった。江戸の例ではあるが、式亭三馬作『敵討宿六始』の後印本（幕末頃）に付された西村與八の「永寿堂株板目録」に「小栗判官記享保七年板」「かるかや道心 同八年板」などを並べ、「右私方株板絵入読本板木今に所持仕候ニ付山東京伝歌川豊国以画作増補追々出板仕候」と、草紙（この場合は合巻）の板行の根拠を「板株」の所持に帰す例を見る。さて、それほどの落差、もしくは断絶が小本・中本と半紙本・大本の間にあったとしたならば、本来小本・中本である洒落本や黄表紙が時に半紙本の形態で出たりすることには、そのこと自体に意味があったのだろうか。あるいは、洒落本の場合には、たとえば談義本への先祖返りといったような事情、もしくは商業上の理由による別の要因に発するものと考えた方がよいのであろうか。つまり、これほどまでに繰り返し論じられていながら、書形というものに対する板元や作者、あるいは読者（購買者）の意識というもの、もうひとつ明確に伝わってこない印象がある。もとよりそれらは、文書・文章として残ることの大変少なかったであろう事柄であったはずなのだが。別の側面から見れば、そのことが近世文芸のジャンル論と具体的なジャンル分類を難しくしているひとつの要因でもあった。

85) もちろんここにも例外はあり、それは幕末に近づくに連れて増加した。先に滑稽本『浮世風呂』と『膝栗毛』の大坂への求板を記した通りである。

86) 浜田啓介「近世後期に於ける大阪書林の趨向―書林河内屋をめぐって―」（『近世文芸』3.1956年）など。



墨利加之部 同上（全五冊）

大日本地名便覧 既刻 両面摺 （惹句は既出）

農工力車 近刻 全五冊 紅毛の工夫を以て製したる起柱起重水車風車木匠具泥匠具をはじめ日時計水時計独にて行車独廻る磨等の図式なり

と、5点の広告が掲げられている<sup>87)</sup>。

これらの文はそのままに、ほぼ10カ月後に板行された<sup>88)</sup>『琉球談』の巻末「森島中良先生著述目録」に踏襲され（ただし板木は別）、これらに「琉球談」「朝鮮談」「紅毛知恵洋」の3点が加わっている。

### 1) 紅毛知恵海

前稿で既に見た通り、『琉球談』須原屋市兵衛板の巻末に付載された「森島中良先生著述書目」に掲載される他の7作が「既刻（出来）」とも「近刻」とも記載されているのに対して、「紅毛知恵海」のみ、「既刻」はもとより「近刻」とも記されていないことは、この本が、ほとんど着手されていなかったことを示しているであろう。

上に見た通り、天明7（1787）年9月刊の『紅毛雑話』はもとより寛政元（1789）年11月刊『万国新話』の巻末「著述目録」にもこの書名を欠き、翌年10月頃刊の『琉球談』に至ってこの書名が掲げられていることは、『万国新話』時点で未だ構想されず、その後1年足らずの間に生まれた構想であったことをうかがわせる。

『琉球談』巻末「目録」の「紅毛にて製作したる珍器の類、先生の工夫を以て、日本にて製作せられし品々を図式にす。誠に古今の珍書なり」という惹句を見る限り、ある程度の下地はあったのであろうが<sup>89)</sup>、中良の「工夫を以て、日本にて製作せられし品々」は、現在までその存在が報告されていない。おそらくは、「紅毛にて製作したる珍器の類」を載せた舶来本を中良が入手し、寛政元年から2年にかけてそれを知った須原屋が「目録」の広告文の如き一書を乞うたといった辺りではなかったであろうか。

87) これは、『紅毛雑話』（天明7（1787）年9月刊）の巻末に載る「森島二郎著述書目」に掲げられた「西洋奇談」（近刻 全五冊）と、「万象雑俎」（同 全十冊）の惹句をほぼそのままに、「万国新話」「大日本地名便覧」「農工力車」の3点を追加したものである。

88) 従来、前野良庵の序文と申椒堂主人（須原屋市兵衛）の跋文がいずれも寛政2（1791）年9月の日付であるところから（序文中に「日者、書賈重ねて其の初稿を請ひ、以て之を梓にし、予に之に序するを需む」（原漢文）、さらに跋文の冒頭に「今歳寛政二年の冬、琉球国王より慶賀の使臣 東の都に來り聘すると聞きて」云々と見える）、寛政2年9月の板行と考えられてきた。しかし「割印帳」では10月21日の割印であり、琉球聘使一行の実際の江戸到着は11月21日であって、この本の実際の板行は9月よりやや遅れるものと考えられる。

「森島中良先生著述目録」の末尾には、現在、「日本橋北室町二丁目 須原屋市兵衛」との書肆名のみが記された本の存在しか確認していないが、板面のバランスより見ても、『万国新話』の初印本と同様、その上部に刊記を記した本が存在したはずであり、おそらくそれには「寛政二年九月」ではなく「十月」の刊記が記されていたものと考えられる。もしくは初印本の刊記が9月であっても、実際の売り出しは10月か11月にずれ込んだのではなかったか。

89) この惹句を見ると、細川半蔵著の『機巧図彙』（寛政8（1796）年刊）に中良が序文を寄せた一事が想起される。中良に「珍器」や「工夫を以て（略）製作せられし品々」への関心が存在し続けたことから、やはり師匠の平賀源内に思いを致さねばなるまい。

以上、「紅毛知恵海」に関しては、その執筆構想がほとんど中良の書留帳類からは推測できない。おそらく、依拠すべき一冊の舶来本があり、その訳述・解説を中心とした著作を意識していたのではなかっただろうか。

ところで、「紅毛知恵海」とのタイトルからは、『知恵海』のシリーズ、すなわち『知恵海』以下、増補・続・拾遺・拾玉・新・万宝・珍術などと続く一般向けの入門百科の存在が即座に思い起こされる。ここからは、『紅毛知恵海』の構想の一端が知られないであろうか。つまりそのコンセプトは、「知恵海」シリーズのレイアウトを借りた海外情報の入門百科ということだったのではなかったか。もちろん、「森島中良先生著述目録」の惹句を最大限に尊重すべきことは論をまたないが、「知恵海（洋）」との外題からは、これが広く流布した「知恵海」シリーズと全く何の関連ももたなかったとは考えにくいのである。

ただし、これはいささか安易な命名である可能性も考えられ、実際に「見聞雑誌」などといった稿本の現存する和漢の考証に比して、「紅毛知恵海」の名に相応しい内容の草稿は、先に述べた通り、少なくとも現存する中良の書留帳の中にはほとんど見当たらない。

## 2) 朝鮮談

上記「森島中良先生著述書目」は、『琉球談』の次に「朝鮮談」を載せる。このあとに「蝦夷談」が来れば三部作として完成し<sup>90)</sup>、おそらく中良も行く行くはそのようなシリーズを構築する構想を抱いていたのに違いあるまい。

ただし、『琉球談』の板行が、寛政2年の琉球聘使の江戸上りに応じて可能となったように、書店の側としては、「朝鮮談」は朝鮮通信使の江戸上りに合わせての板行を意識したはずである。さらに「蝦夷談」は、琉球聘使や朝鮮通信使に対応するようなトピックを欠き、おそらくは、『琉球談』の売れ行きに応じて、はじめて「朝鮮談」も「蝦夷談」も具体化の俎上に乗るような本であったのではないか。

ただ、「森島中良先生著述書目」は、『琉球談』の一冊に対して、「朝鮮談」が明確に「二冊」であることを謳っており、これが単なる皮算用であったとは思えない。同様のことは、「此書も『琉球談』のごとく、朝鮮国の事実を記し、朝鮮文字、并に言語等まで悉く載たり」という広告内容にもいえるであろう。

この書もまた、『紅毛雑話』巻末の「森島二郎著述書目」にも、『万国新話』巻末の「森島中良先生著述目録」にもその書名を見ず、『琉球談』の「森島中良先生著述目録」に至って出現したものであった。それは、『万国新話』出版の時点では『琉球談』の出版が計画されておらず、その系列に連なる「朝鮮談」（さらには「蝦夷談」）の構想は未だ出現していなかったということを示すのであろう。ただ、『琉球談』の成立事情を推測する限り<sup>91)</sup>、『中山伝信録』

90) 中良の友人であった林子平の『三国通覧図説』は、板本での流布がほとんど行なわれなかったことで知られるが、写本に関してはおそらく近世後期の写本全体の中でも上位に入るほど頻繁に写本のつくられた本であった。その林子平のいう「三国すなわち蝦夷・朝鮮・琉球」という概念規定は、この本の普及とともに堅固化した。新井白石辺りに発した「三国」概念は、そのように近世後期に至って「遠い異国」の明確な意識化とともに「近い異国」として三位一体化して意識されるようになったが、問題は、その意識が維新以後の周辺国の属国視と無縁ではなかったことである。

91) 拙稿「森島中良編『琉球談』の考察」『洋学資料による日本文化史の研究』（吉備洋学資料研究会）Ⅷ、1995年。

をベースに<sup>92)</sup>、比較的短時日で編んだものではなかったかと考えられるので、「朝鮮談」の場合にも典拠の機軸となるべき書が決まれば、さほどの準備期間はかからなかったに相違あるまい。

### 3. 稿本補遺

#### (1) 中良著作の写本の少なさ

以上、板本について考察してきたが、その稿本が少なくないのにもかかわらず、また、需要の見込めるものがいくつもあったのにもかかわらず、中良著作の稿本は（編著ではあるが厳密には著作と呼べるかどうか微妙な「海外異聞」を除いて）、写本で行なわれるものがなかった。現在に至るまで、一本のみの稿本で伝えられるものがほとんどであったことは、中良の稿本・草稿が、どれほどかの間桂川家中に保存され、外に出ることがなかったであろうことを物語る。また仮に流出することがあったとしても、奥外科医桂川家が健在の間は禁忌感が大きく付随したことによるものと推測される。

この点は、その生前には田沼意次や諸大名との密な関わりが喧伝されたのであっても、最終的には一介の浪人にすぎなかった師匠平賀源内の著作が、その没後に広範に流布し、自由に手を加えられていることと対照的といえる。もっとも、没後なお増す源内のネームバリューが、そのような源内本の商業的価値を支えていたことも明らかなのであり、その意味では、むしろ源内の事例が例外的であったとも言い得るのであるが。

#### 1) 紀行

板本を中心に考察するという本稿の主旨とはいささか背馳するが、前稿の訂正を要することでもあり、また、先に述べた中良の「旅の人」の姿にも関わることなので、「紀行」に関して補訂・補足しておきたい。

国会図書館に「万象随筆」の総称で収められる、小本5冊、中本2冊から成る7冊の書留帳（備忘録）の内、表紙に「紀行」と墨書された小本がある<sup>93)</sup>。その内容は、備中新見藩の熊谷駅から江戸（正確には川崎まで）に至る道中記である。しかし他の6冊が明らかに中良の筆跡であるのに対して、この1冊のみ中良の筆跡とかなり趣きを違える。また、表紙の紙質が他とは異なり、原稿用紙も他が茶色系統の匡郭をもつものに対して、これのみ青色のことなどから、中良とは別人の帳面が混入したものと考えた<sup>94)</sup>。ただしそこでは、一方でこれら一揃いの書留帳の中に中良と全く関係のない者の帳面が混入する可能性は極めて低く（初丁表には中良の舎号である「桂林舎」の印が捺されている）、おそらくは中良の随行者の旅日記辺りではなかろうかと推定した。

このような推測に至ったのは、その旅程が、寛政10（1798）年中良の長崎行の後半のものであったと仮定したからにはかならない。寛政10年頃の筆跡としては、受け入れ難いと判断

92) 横山學『琉球国使節渡来の研究』（吉川弘文館、1987年）参照。

93) その位置より、かつて「何々紀行」という外題を記した題簽があり、そのちょうど「紀行」という文字のあった場所に書かれたものと思われる。

94) 注38)の拙稿『『類聚紅毛語訳』成立の背景』参照。

したのである。しかし、改めて「万象随筆」を検討した結果、以下の結論を得るに至った。

- i) 「紀行」の初丁表（右下）に捺された「桂林舎」の朱印は他に見ることができないが、「万象随筆」の内の「代紳漫抄」の初丁右下、同じ部分に、ほぼ同じ大きさと形の切除跡がある。すなわち「万象随筆」を構成する書留帳の他のものにも「紀行」と同様の印（それも、中良の号のひとつである「桂林舎」の舎号印）をもつものがあったと考えられるのである。「桂林舎」の用例<sup>95)</sup>より「紀行」の成立年次を推測しておくならば、「海外異聞」の例はしばらく措くとしても、この舎号が享和2（1802）年から用いられていることは、寛政12（1800）年刊（同11年10月成立）の『桂林漫録』（ここには「桂林舎」という記述はないか）という外題と、「桂林舎」への改称とが連動していることを窺わせる。
- ii) 「紀行」では冒頭の熊谷駅（岡山県新見市熊谷）から高柳村、根雨峠（鳥取県日野郡日野町根雨）と過ぎ、美甘駅（岡山県真庭郡美甘村）に至って「廿六（26）日」という日付が記される。これに対して、最後の日付は戸塚から川崎に至る翌月12日のものであり、これを寛政10（1798）年の中良の長崎行の日程に擦り合わせて、同年10月26日から11月26日までと考えたのである。しかし「紀行」の内容を再検討すると、「清風好」や「暑」などという記述に出会う。旧暦の10月末から11月といえ、新暦では12月前後で冬である。このような内部徴証から見ても、「紀行」が寛政10年のものではなかった可能性がある。そうであれば、筆跡を、この頃のものと特定する必然性はなくなる。たとえば、さらに若い頃のものであれば（「桂林舎」の号は寛政以降のものであるが、これを後年に捺したものとして）、筆跡に変化があって当然である。
- iii) 筆跡に関していえば、旅の記録であるため、携帯式の継ぎ筆で書かれた可能性などが考えられる。その場合、筆跡に相当の変化があらわれても不思議ではない。
- iv) 以上に加えて、「紀行」の内容そのものには、これが中良筆の旅の記であった可能性をもつ部分がいくつか見出せる。特に、近江の義仲寺に至り「芭蕉翁墓アリ感懷也古雅也」などと感慨を記す点（中良の松尾芭蕉への親炙については、拙著『万象亭森島中良の文事』第3章第3節に論じた）。随所に方言への観察が記されている点、さらに風俗（身なりや風

---

95) 「桂林舎」あるいはそれに関わる号を中良が用いた事例は、管見の範囲では、以下の9例を数える。

- ① 寛政元（1789）年4月『海外異聞』正編の序文末尾に「桂林舎／万象主人」と署名。
- ② 享和2（1802）年12月16日に石川大浪の『聚珍画帖』の序文を撰する。その末尾に「題於桂林舎之南軒」。印記に「桂林書舎」。
- ③ 文化元（1804）年正月装丁の「惜字帖」に「中良」「桂林主人」との署名。
- ④ 同4（1807）年、大田南畝、「一話一言」で中良を「桂林斎」と呼ぶ。
- ⑤ 同6（1809）年2月2日、「俗語解」巻4の浄書を終え「桂林舎中良虞臣」と署名。（岡田袈裟男「森島中良晩年探索—あるいは一文人の言語宇宙」『日本文学』1983年1月号参照）。
- ⑥ 同7（1810）年4月26日、「俗語解」巻11、巻12を浄書。いずれにも「桂林舎中良虞臣」の署名。
- ⑦ さらに、成立年代不明であるが「万象亭読書録」（内題「読書随抄」）中の「小説十様錦」の署名が「桂林舎」である。
- ⑧ 同様に、署された年代は不明であるが、国会図書館に「万象随筆」の総称で収まる書留帳の内「代紳（以下題簽切除）」との外題をもつもの（小本1冊）の内題が「桂林舎偶侍」。
- ⑨ 同じく「万象随筆」中の1冊「紀行」に、先述の通り「桂林舎」の朱印。同じ「桂林舎」の朱印が捺されていたと考えられる切除跡が、「万象随筆」中の「代紳漫抄」に存在する。  
その署名が「桂林逸史」であることから、この「代紳漫抄」は桂林舎時代の書留帳であったと考えられる。

習)を細かく観察している点など、中良の趣味に合致するように見える。

v) この「紀行」を、「万象随筆」中のもうひとつの紀行である「入洛掌記」(こちらは、間違いなく中良の筆跡)と比べるならば、僅かではあるが図画の描かれている様子が共通する。

以上の諸点より、現在では「紀行」が中良自筆の旅日記であった可能性も低くはないと考えるに至っている<sup>96)</sup>。

## おわりに

「板木総目録株帳」に載り、なお「出勤帳」や奥付等から確認されるものとして、

- ① 『驪山比翼塚』(浄瑠璃本)
- ② 『万代曾我 おちよ半兵衛』(同上)
- ③ 『同 おはん長右衛門』(同上)
- ④ 『桂林漫録』(随筆・考証随筆)
- ⑤ 『紅毛雑話』(海外情報・考証随筆)
- ⑥ 『万国新話』(同上)
- ⑦ 『鄙都言種』(教訓本・啓蒙随筆)
- ⑧ 『日本地名便覧』(地誌・地名便覧)
- ⑨ 『田舎芝居』(洒落本・滑稽本)

と、中良著作9点(内3点は合作、1点は現存不明)の板木の大坂への移動(求板)先が確認できた。中良の没する文化7(1810)年頃までに、その著作のうちの少なくとも9点が、その板木は大坂へと移動していたのである。それらは、地本(原則的に板木がその地から離れることはない)である戯作本を除けば、中良著作板本の半ばを占め、なおさまざまな意味で、中良を代表する作と言い得るものであった。

これに、10点目として、大坂の本屋仲間記録には登場して来ないが、最終的に大坂へと求板されたものとして、前稿で考察した『琉球談』(既述の通り当初大坂への移動の予定であったとする推定を削除する。求板され寛政7年以降京都で摺を重ねた)を加えることができる。

無論これら以外にも、板木が上方へと移動した中良著作が存在する可能性は低くない。たとえば、中良が著した読本は、現存の報告されない『杓草紙』を除いて4作にのぼる。江戸読本類が上方、とくに大坂へと多数求板されたことは周知の通りである。その中に中良の読本があった可能性があるが、この点については未確認である。

前稿に、「10点ほどが上方へ移動」と記したが、その内実は以上のような細目となる。本稿では、主に「板木総目録株帳」など『大坂本屋仲間記録』に収録された記録類、及び実際の著作板本に基づき、以上の9点を中心に考察を加えた<sup>97)</sup>。

96) その成立が寛政12年以降であれば、寛政10年と推測される長崎行の他にも中良が中国地方以西に赴いたことになる。いずれも、詳細については別稿を期し、改めて考察したい。

97) このように書籍目録類の整備に従って、中良の著作も「分類」されると、それらには、おのずから、ある示標がつけられることとなった。考えてみれば、これは書店の店先でも同様であっただろう。つまり、書物は(ひとつにはその形態において、ひとつにはその商品という目的性において)、おのずから「分類」というコードをみずから引き寄せる。言い換えれば、書物(本)とは、分類されることを自ら欲する「物」なのであった。そもそもここにジャンル論の難しさも意義も交々包摂されている。

さて、きわめて江戸的な文人<sup>98)</sup>の代表格のひとりであるというイメージの強い森島中良を表す著作板本の数々、とりわけその代表作と目されてきた諸書が、流通期間としては江戸での刊行より上方で版を重ねる期間の方が長かったという事実は、見過ごし難い。そのような江戸板本の大量かつ長期にわたる上方流入という現象が、はたしてどのような社会的意味をもつのか、その点は十分に調査・考察の対象となり得るものと思われる。

もとより、板木の移動は、同時に「本」そのものの基本的な流通域の移動・拡大をも意味する。それは、「知」や「文化」の移動ということでもあった。そのように、板木の移動の活発化は、近世後期から幕末に至るに連れて、「知」の全国的な波及と流通を、結果的に支えることとなった。

たとえば基本貨幣（金本位対銀本位）すらを異にする経済システム、あるいは武士人口が半数を超えた江戸とわずか0.1%程度であった大坂というような、身体意識レベルでの政治的土壌から経済、警察システムまで現代に置き換えて見ればほとんど同盟関係にある2国家と呼んでよいほどの差異をもった「江戸」と「上方」の、近代的中央集権国家の成立を受けて東京中心国家と化した現在に至る「文化の均質化」状況が、このような「出版権移動」にともなう印刷物の一方的な大量流出・流入という現象によって、すでに近代を先取りする形で醸成されていた状況というものが考えられよう。

従来は、江戸中期の「江戸っ子」意識の成立、あるいは「水道の水で産湯をつかい」「こいつは日本」などという俚言や通言（流行語）に象徴されるような、いわば江戸中華意識の発生が、常に江戸を中心に語られ、論じられてきた。そして上方は、常に根強い江戸への対抗意識を長い間抱懐しつづけたという対比的な図式が性急に描かれるのが常であった。しかし、江戸中心思想・指向を、ある時点で好むと好まざるとに関わらず上方・関西が受け入れた時期というものがあつたはずであり、それを準備・醸成する社会状況の変化が上方自体に存在したはずなのである。江戸への反発意識が伏流水として流れ続けていたという議論は不可能ではないにせよ、上方・関西が、江戸・東京中心思想に流れた時期というのは、確かにあつた。その意味でも、江戸＝東京文化の攻勢によって上方＝関西文化が希薄化する文化現象が、どのように（単なる中央集権化に従う単純な構造理論ではなく）準備されたかという点は、検討課題として興味深い<sup>99)</sup>。

また、より狭い範囲での以後の課題として、大坂を中心とする上方で江戸の著作がどのように享受されたか、その受け入れられ方や読まれ方は江戸とは異なっていたか、あるいは共通する部分が大きかったかという点が挙げられる。

本稿冒頭で設定したもうひとつの設問、すなわち江戸から上方へと移動した本（板木）に何らかの傾向的共通性を求められるか否かという点であるが、以上、森島中良の著作に関する考察のみからは、述べ来たったようにある程度の傾向性は認められるものの、その内容に一定の

98) ある時期江戸の文華の中心を占めた十八大通の一人にも数えられる中良を「兄の居候としての生涯を、内外雅俗広汎な文事についやした」と称し、当代文人の代表に掲げたのは中村幸彦氏であった（『中村幸彦著述集』第11巻所収「近世文人意識の成立」）。

99) 大阪弁が「第二標準語」と呼ばれることに象徴されるような現在の「大阪」観は、総体として80年代以降、とりわけ90年代に入って形成された。しかし、それでもなお「第二」の座に復帰したのみであり、それ以前の大阪の位置づけが「大きな地方都市」に過ぎなかったことを思い起こさせる。

法則性を求めることまでは、未だ難しいものと思われる<sup>100)</sup>。

以上、前稿の発表以来、早卒の間に拾遺を綴らねばならぬ局面に逢着したことは、偏えに筆者の不勉強による。とりわけ、『田舎芝居』と『鄙都言種』とが「板木総目録株帳」に掲載されていることを見過ごして、これら二書に関する私見を述べたことは、実に前稿の不首尾であった。本稿を以てそれらを補正するとともに、専ら不明を恥じるものである。

〔付記〕

本稿も、前稿と同じく1997年度大阪商業大学研究奨励助成（研究課題「上方、江戸比較文学史の構想に関する研究－近世後期を中心として－」）及び1997、98年度文部省科学研究費助成（基盤研究（C）、研究課題「ジャンル・文体・出版システムを中心とした、上方戯作と江戸戯作の比較文化史的研究」課題番号09610448）に負って成る。以上を明記し、関係各位への謝意に代えたい。

また、資料閲覧に際して便宜を賜った所蔵・研究機関各位に御礼申し上げる。とりわけ大阪府立中之島図書館、国立国会図書館古典籍資料室及び閲覧室別室に於て、関係各位の御厚意を得たことを記し、深謝するものである。  
(1999. 4. 15)

〔追記〕

本稿中に掲げ、その内容を推測した『日本地名便覧』（寛政4年再板）を、本稿校正中に入手する僥倖を得た。その詳細は別稿に譲らざるを得ないが、本稿で推定した、寛政2年には該書の板木は大坂へと移動していたという点のみ、寛政4年に未だ板木は須原屋市兵衛の許に存在したと訂正しておきたい。  
(1999. 8. 27)

---

100) それぞれの本屋に各々の営業事情はあっただろうが、早々に大坂へと求板されたものの江戸で流通させた方がより以上の利益が認められそうな本も少なくなかった。しかし、それらも江戸である程度普及したならば、新たな購買層に向けて売り出すほうが得策と判断された場合があったのに相違あるまい。その場合にも、大抵は、個々の書物を検討してというより、書店同士の紐帯などの流通ルートに従って板木（版權）の委譲・移動が行なわれたと考えたほうが自然であるものの方が多いように思われた。